37
368
禁複写

始

ハエVT-81 37-368

大町桂月著

日本男兒論

全

大正
3. 11. 27
内交

冨山房發行

序

萬世一系の天皇を戴ける國也。開闢以來、金甌無缺の歴史を有する國也。大和魂の磅礴せる國也。日本刀の鋭利なる國也。櫻花の爛漫たる國也。富士山の玲瓏たる國也。我等の祖先はこの國に生れ、この國に盡し、而して靜に地下に眠れり。我等は其子孫に非ずや。其祖先の血を傳へたるに非ずや。不肖の子孫を以て甘んずべきに非ず。況んや不忠不孝の子孫となるをや。世界の文化日に進み、交通月に開け、東西遠く疎隔したりし歐米も、今や比鄰となりぬ。而して我國も列强競爭の渦中に立てり。退かむか、唯自滅あるのみ。進まむか、艱苦あると共に、光明あ

り。英獨露佛墺伊米と共に、世界の八強と目せらるるに至りたるが、前途は遼遠也。油斷すれば、忽ち亡國の列に落ちむ。我等の責任や大也。我等は日本男兒として一致せざるべからず。國家と生死せざるべからず。地下の祖先を辱むべからず。而して物質上にも精神上にも優秀なる國民として、世界の上に立たざるべからず。われ豈に日本男兒たるに負かずと云はむや。唯破れたりとも、我鎧を著、痩せたりとも、我馬に跨り、諸君と同じく進まむのみ。

大正三年初冬青島將に陷らむとするの時

大町桂月

日本男兒論目次

一　日本男兒論……一
一　我は日本男兒なり……一
二　黃色人種と白色人種……八
三　『日本男兒』の非難者……一七
四　日本人と日本男兒……二八
五　男兒の觀念……三二
六　日本國の觀念……五〇
七　大和魂の本體……六五
八　日本男兒を代表する文豪……八一
九　日本男兒を代表する武士……九八
二　神州論……一一四

三　日本男兒と正坐……一二三
四　日本男兒と六尺褌……一三三
五　古武士……一四四
六　勇ましき切腹……一五〇
七　日章旗……一六三
八　捨鐘……一六四
九　縛られたる犬……一六六
一〇　畜生根性……一六七
一一　チューリップの花……一六八
一二　山道……一六九
一三　杖……一七一

一四　大根……一七二
一五　人の顏……一七四
一六　人の目……一七六
一七　土俵際……一七七
一八　泉岳寺の墓の數……一七八
一九　金の指環……一七九
二〇　門の柳……一八一
二一　東京の雨……一八三
二二　馬と牛……一八四
二三　吹けば飛ぶ……一八五
二四　二十歳と四十歳……一八六

二一五　心は新なれ……一八九
二一六　志は堅なれ……一九三
二一七　慮は密なれ……一九五
二一八　膽は大なれ……一九八
二一九　情は溫なれ……二〇〇
三〇　途上所見……二〇五
三一　苦悶に對する覺悟……二〇六
三二　自覺錄……二一〇
三三　偉人論……二一六
三四　帝王の船……二一七
三五　勇氣の本源……二三七

三六　子は不便也……二四〇
三七　墓地より見たる人生……二五〇
三八　自然の征服……二五六
三九　現代と戰國時代……二七二
四〇　片々錄……二八五
四一　弓物語……二八九
四二　交番物語……三〇〇
四三　近江聖人……三〇四
四四　吃る英雄……三〇八
四五　碁と文章……三一八
四六　春日野の鹿……三二九

四七 近藤重藏の富士山……三三六
四八 歌日記……三四二
四九 鹿野山……三四七
一 鹿野山二十咏……三四七
二 神野寺……三四九
三 演說會……三五一
四 山中の一軒家……三五四
五 九十九谷……三五七
六 鳥居崎……三五八
七 神木の鳥……三六〇
五〇 火を噴く島……三六一
五一 配所の月……三六九

日本男兒論

大町桂月著

日本男兒論

一 我は日本男兒なり

我日本、國を開いてより僅に五十年、物質的文明は、未だ全く歐米を凌駕するに至らざれども、物により、事によりては、歐米に優れるものあり。ともかくも鴈行の程度までは漕ぎつけたり。殊に日清、日露の二大戰役を經て、我國は世界の强國と認めらるるに至れり。大正の世の我領土は、明治の初に比すれば、幾んど

二倍せり。盛なりと云はざるべけむや。然れども之を内に顧るに青年者と壯年者との隔離、日に〳〵甚しからむとす。青年者は進む者也。壯年者は守る者也。進む者と守る者とは、一致し難し。

いつの世にても、青年者と壯年者とは隔離すべき筈のものなれど明治の前半以前には、相一致して離れざるものありき。即ち忠君愛國に於て、相合したり。青年者は進む。されど、忠君愛國に進みたり。壯年者は守る。されど、忠君愛國に守りたり。守ると進むとにて、隔離する所ありたりとも、忠君愛國に於ては、青年者なく、壯年者なく、國民合して一なりき。然るに今や壯年者は忠君愛國と離るゝ者少なけれども、青年者は忠君愛國と離るゝ者多し。壯年者は曰く、今の如き青年の狀態にては、將來國家を繼續せむことは覺束なしと。青年者は曰く、壯年者は頑冥也、我等近代人の心理狀態を解せずと。一方は叱り、一方は泣言を吐く。叱

るが非なるか。泣き言を吐くが是なるか。隔離する所ありとも、面と向つて相爭ふならば、猶可也。然るに全く意志の疏通を缺きて、背中合せとなるは、青年者の慶事にあらざる也。壯年者の慶事にもあらざる也。否、國家の一大危機也。

江戸三百年は云ふも更なり、明治の前半以前までは、國民の精神を一貫したるものありき。そは『侍』といふこと也。『侍』が日本の中等社會を組織したり。『侍の精神』が日本の精神界を一貫したり。侍は刀をさしたりしかど、妄りに刀を拔きたるものに非ず。斬棄御免の公許ありたれども、妄りに人を殺したるものに非ず。侍には侍の道ありき、侍の禮ありき、侍の心得ありき。刀を拔くには、拔くべき心得ありき。侍の籍にある者のみが『侍の精神』を有したるに非ず。農工商の身なりとも、苟くも普通以上の者はみな之を有したり。『天河屋義平は男でござる』と云ひしが如き、

其一例也。刀をさすさゝぬに拘はらず、日本の男子は、みな『侍』の精神』を有したりき。明治以後、四民平等也。されど、三百年來養成したりし『侍の精神』は、一朝にして無くなるものに非ず。西南戰爭に於ける賊軍は、もとの『侍』なり。官軍は徵兵也、卽ちもとの『侍』以外の兵卒が多かりし也。然るに、平民にも『侍の精神』ありき。徵兵は決して、昔の侍に劣らざりき。その『侍の精神』は、日清戰爭にも發揮したり。日露戰爭にも發揮したり。

余は國家事あるの日は、今後とても、我國民が『侍の精神』を發揮せむことを疑はず。されど、之が養成を怠らば、『侍の精神』が失せざるにしても、弱くなるを免れざるべし。殊に戰時に於ける忠勇の行動は、『侍の精神』の一部分也。戰爭に强きのみが國民の取得には非ず。平時に於ても、『侍の精神』が充實し居らざるべからざる也。然るに、今は江戸時代と境遇を異にす。もとの『侍』

は、祖先傳來の俸祿ありて、少しも生活の心配なし。故に全力を武士道に用ゐたり。『我は武士なり』との觀念だにあれば、萬事自から武士の道を外れざりし也。『武士に負くるものか』との觀念、農工商の社會にもありて、一般の國民は『侍』を標準としたり。然るに、『侍』の階級無くなりたる今日、全力を武士道にのみ用ゐるを得ず。一にも利、二にも利、物質上、殊に金錢上に成功したるものゝみが跋扈するやうになりて、國民一般に標準を失へり。『我は武士なり』との觀念もなくなり、『武士に負くるものか』との觀念もなくなり、世の中は、唯金錢の奪ひあひとなれり。危い哉、金以外には、國民の精神を一貫するもの、全く失せむとす。

斯く青年者と壯年者と隔離し、國民一般に標準とする所を失ひて個々分立しては、國家を組織するの基礎、實に薄弱なりと云はざるを得ず。よしや、言語を同じうするとも、人種を同じうする

とも、衣食住を同じうするとも、國民の精神にして統一する所なくんば、烏合の民也。完全なる國民にはあらざる也。翻つて世界の形勢を見よ。露や、獨や、英や、米や、佛や、世界の列强は、みな手を東洋に伸ばして、東洋の風雲日に益〻急也。支那の大陸も、やがて列强の手に分割せらるゝやも知れず。日本國民にして苟くも神經あらば、之を對岸の火災視して止むべけむや。北の露國は陸兵を多くし、東の米國は軍艦を增して、今日の東洋は、『山雨欲レ來風滿レ樓』の觀も啻ならず。我にして萎縮すれば、自滅の外なし。外に伸びむとすれば、四面みな强敵也。この頃、米國の一隅に起れる排日案の如きも、大袈裟に云はゞ、國民の死活問題也。國運振ふか、衰ふるか、我國興廢の機實に今日に在り。然るに國民個々分立して、精神の統一を失はゞ、何を以て能く外に當るを得むや。支那今日の窮狀も、つまりは國民の精神の統一せ

ざるより起れる也。今日我國の急務は多端なるが、急務中の急務は、國民の精神の統一にあり。支那に鑑みても、其然らざるを得ざるを痛切に感ずべし。青年者も起て。壯年者も起て。個々分立せる國民みな起て。我々は皆日本男兒に非ずや。萬世一系の天皇を奉ずる日本男兒に非ずや。開闢以來未だ嘗て外國の辱を受けざる日本男兒に非ずや。進取の歷史を有して退嬰の歷史を有せざる日本男兒に非ずや。金に成功する者のみが、一般の標準にならば、個々益〻分立せむ。古來の亡國は、みな是れ也。さればとて俸祿に衣食したりし『侍』を標準とせむは、無理なるべし。余は玆に大呼す、日本男兒といふことを標準とせよ。壯年者も青年者も、日本男兒といふの點に一致せよ。個々の精神を、日本男兒の精神にて統一せよ。國民はみな叫べ、『我れは日本男兒なり』と。

二　黄色人種と白色人種

われこの頃柏木の野に於て、早稲田大學の選手がフイリッピンの選手と野球を闘はせるを見たりき。余の側に坐り居りし一青年その同伴者に向つて語つて曰く、『フイリッピンの選手の顔は文明的に非ず。智慧ありさうに見えず。米國の選手ならば、負けても仕方なし。あのやうな南洋の土人に負けては、日本男兒の名折れなり』と。これ何思はず眞情を吐露せしものなるべし。『南洋の土人に負けては日本男兒の名折れなり』とは、何人も拍手喝采すべし。されど、『米國の選手ならば負けても仕方なし』とは、何たる弱音ぞや。何ぞ自から侮るの甚しきや。試に米國の人々の心を想像して見むに、米人が日本の選手を視ると、なほ日本人がフイリッピンの選手を視るが如きものあらむか。嗚呼世界が白色人種に征服

せらるゝこと久し。世界は白人の世界也。白色人種といふことは歐米人の何人も一致する一種の誇り也。日本男兒は德川政府の政策の爲めに、久しく東洋の孤島に眠りたりき。一朝懶眠さめて、海外に活動せむとすれば、到る處、歐米人に機先を制せられたり。科學的文明に於ては、今の處、何と氣張つても後進者也。白色を一般の誇とする歐米人の眼より見れば、我等黄色人種は黑色人種と同じく異人種なるべし。されど、日本男兒豈に自から侮るべけむや。請ふ、試に國史を讀め。平安朝は藤原氏の全盛時代なりき。藤原氏以外の人は、昇殿するを得ざりき。平忠盛平氏にして始めて昇殿せり。當時の藤原氏は、みな嫉妬輕蔑の眼を放てり。伊勢の瓶子は酢甕なりと笑ひはやせり。瓶子は平氏に言ひかけ、酢甕は眇に言ひかけて、忠盛が伊勢より出でゝ其の眇なるを嘲りし也。その子の清盛が青年時代に、高屐を穿きて闊歩せるを見て

は、高平太と嘲れり。然れども驕るものは久しからず。盛なる者は必ず衰ふ。藤原氏は見る〳〵清盛に蹴落されぬ。平氏一躍して藤原氏に代れり。平氏の公達は、みな好男子也。歌も善くすれば音樂も善くす。されど武術に疎也。木曾義仲一呼して之を西海に追へり。源義經、更に木曾を破り、終に平氏をも亡せり。而して源氏が平氏に代れり。義仲は木强の田舍漢也。當時の都人はみな、その粗野なるを笑へり。義經來るや、評して曰く、義仲には優れり。されど、平家の公子の劣等なる者に比するも、なほ劣れりと。然るに、優れる平氏が敗れて、劣りし源氏が天下を取りける也。藤原氏が白色人種ならば、平忠盛、清盛は黃色人種なりしなるべし。平氏代りて白色人種となりし際には、源義仲、義經は黃色人種なりしなるべし。今日の日本男兒も、藤原氏全盛時代の平氏、若くは平氏全盛時代の源氏と思へば、歐米人に對し

て、何も自から卑下するを要せざるべきに非ずや。

源氏平氏を後進者とすれば、藤原氏は前進者なりき。されど後の雁が先になる譬もあり。後進者豈にいつも前進者の下にあるものならむや。藤原氏は餘り榮えすぎたり。餘りに蕃殖し過ぎたり。而して藤原氏としての統一を缺きたり。之に反して、平氏は桓武天皇の後胤、平將軍貞盛の子孫にて一致したり。源氏も亦清和天皇の後胤、八幡太郎義家の子孫にて一致したり。榮えに榮えたりし藤原氏が源平二氏に蹴落されたるも、氏族として精神の一致を缺きしことが、その一大原因ならずとせず。平氏も平將軍の子孫として一致したりし間は强かりき。藤原氏の皮相を學びて、平將軍を標準とせざるやうになりて、その勢衰へたる也。その平氏の勢衰へたるに際して、源氏は八幡太郎の子孫にて一致したり。故に能く平氏を斃したり。然るに、源氏も八幡太郎の子孫にて一

致せずして、骨肉相食むやうになりて、忽ち北條氏の爲めに亡されたる也。日本男兒願くは之に鑑みよ。藤原氏の全盛時代に、平氏が平將軍の子孫にて一致したりしが如く、平氏の全盛時代に、源氏が八幡太郎の子孫にて一致したるが如く、われらは、『日本男兒』にて一致せざるべからず。富める國、必ずしも強からず。兵の多き國、必ずしも強からず。國民の最も能く一致せる國が、最も強き也。平氏の全盛時代に、大納言平時忠揚言して曰く、方今平氏に非ざるものは人にあらざるなりと。されど、源氏は散在し、且つ零落せりとも、なほ八幡太郎の子孫にて一致したりき。伊豆の賴朝、鞍馬の義經、木曾の義仲、豈に人に非ずして終るものならむや。

我日本を歐米諸國に比すれば、源平二氏の藤原氏に於けるが如く、後進者也。一般の文明、雁行の程度には達したれども、未だ

全く對等なりと云ふを得ず。これ後進者の境遇として、已むを得ざる也。見よ、國を開いてより僅かに五十年なるに非ずや。今後五十年を經なば、必ず少なくとも對等の地位に達せむ。五十年にて達せずんば、百年にて達せむ。百年にて達せずんば、二百年にて達せむ。『米國の選手なら、負けても仕方なし』といふが如く、自から侮りては、折角の發達も停止すべし。國家の前途も覺束なし。眞の『日本男兒』は、古來未だ嘗て斯る弱音を吐かざる也。

試に支那の歷史を見よ。六國を打して一丸としたる秦は、當時最も後進なる國なりき。下つて、宋の金に破られたる、明の清に破られたる、いづれも後進者の勝利也。波斯亡びて希臘榮えたる、埃及亡びて羅馬榮えたる、羅馬亡びて佛蘭西榮えたる、佛蘭西稍衰へて獨逸榮えたる、世界の歷史は古今後進者の勝利を語る。後進の日本、豈に自重せざるべけむや。

平時忠が平氏にあらざるものは人に非ずと云ひし舌の根未だ乾かざるに、源頼朝一呼して起てば、關八州は忽ち源氏に風靡しぬ。時忠を始め、平氏の人々は如何ばかり吃驚したりけむ。歐米人が世界は白人の世界なりと自から誇りしに、我日本が一躍して世界の一等國に入りたるは、なほ平氏の全盛時代に、頼朝の崛起したるが如し。心ある歐米人は、さぞや驚きしなるべし。藤原氏の人々が平忠盛の昇殿を嫉視したるが如く、歐米人は我日本の勃興を嫉視するもの多かるべし。されど嫉視を恐れては、豈に勃興するを得むや。説を爲す者あり、曰く、我日本の勃興は、世界の嫉視する所なり。この際、我國民が『日本男兒』を振りまはさば、嫉視益甚しかるべく、四方より包圍攻撃を受くるに至るべし。これ自から國運の發展を詛ふものに非ずやと。『日本男兒』に一致する事が、唯戰を好む國民なりとのみに解せらるゝならば、『日

本男兒』を振りまはすことは、世界の平和に取りて、太だ物騒也。然れども、當年の『平將軍の子孫』や、『八幡太郎の子孫』が、必ずしも唯戰を好むことを意味したるにあらざるが如く、『日本男兒』も、決して唯戰を好むことを意味するものにあらざる也。歐米人はその白色人種なるを誇ると共に、基督教國民なるを誇とす。基督教を信ぜざる國民は、人道を解せずと誤解する者さへも有り。然れども、基督教を奉ぜざる國民、豈に必ずしも人道を解せざるものならむや。『日本男兒』は、人道を解するの點に於て、決して歐米人の後塵を拜せざる也。『日本男兒』は道德上最高の意味を含む。よしや、一時歐米人の誤解を招くことありとも、『日本男兒』主義が、いよ〳〵世界に發揮せらるれば、誤解は忽ち消ゆべし。『日本男兒』主義を世界に發揮し、人類を救濟するは、實に日本男兒の天職也。安んぞ歐米人の誤解を恐れて萎縮すべけむや。

又說を爲す者あり。曰く、日本國民は人口の增加甚し。須らく海外に發展せざるべからず。然るに日本國民は、外國に行きても、外國に化せず。これ國民の發展上の一大障害也。その上に、『日本男兒』を振りまはしては、その障害を助長するものに非ずやと。外國に化するものは、亡國の民のみ。歐米人を見よ、決して外國に化せざる也。我日本人のみが外國に化せざるのみにあらざる也。歐米人は、世界到る處、我國語を用ゐ、我衣食住を用ゐ居るに非ずや。之に比すれば、洋服を纏ひ、洋食を食する日本國民は、外國に化し易き國民也。餘りに化せざるも非なれども、餘りに化し易きも亦考へもの也。今日東京に住める人を見るに、直に東京の言語風俗に化する者は、必ずや翩々たる輕薄才子也。ひとかどの人物は、化すべきは化すれども、妄りに化せずして故國の美風を失はざるもの也。世界の優等人種も亦之と同じく、妄りに

他に化するものに非ざる也。國民は何處に行くも、我國民の美風を發揮するだけの意氣込なかるべからず。もしも之なくんば、亡國の民也。よしや、他に容れられむとして、他に化するとも、必ずや奴隷視せられむのみ。『日本男兒』は狹隘なる排外思想を含むものに非ず。『鄕に入りて鄕に從へ』の眞意と衝突するものにあらざる也。

三　『日本男兒』の非難者

人或は曰はむ、歐米の文明の進步は、實に迅速也。我國の文明の進步も迅速なれども、今なほ後進者の位置に在り。然るに、日露戰爭以後、國民の氣驕り、世界の一等國に列したりと自から標置して、惰氣既に滿々たり。斯くては、世界の競爭場裡に立ち得べくもあらず。其上に『日本男兒』を振りまはして、自から尊大

に構ふれば、文明の進歩忽ち停止せずやと。これ甚しき誤解也。古來、支那人は自から中華、若くは中國と稱し、他の國を東夷西戎南蠻北狄と見下して、尊大に構へたりしかば、其文明は次第に退歩したりし也。今日若し我國にして『一等國』を振りまはさば、必ずや、支那の覆轍を踏まむ。されど、『日本男兒』を唱ふるは、之とは大に趣を異にす。試に明治維新前後、歐米に學びしものと、今日歐米に學ぶものとを比較して見よ。前者は『日本男兒』の念強く、己れの恥は『日本男兒』の恥なり、己れの名譽は『日本男兒』の名譽なりとて、自から勵み、自から戒めて、一擧一動を愼めり。後者は『日本男兒』の念薄く、己れは己れなり、旅の恥はかき棄てなりとて、國辱をさらすもの少なからず。二者の差を見ても、『日本男兒』の有無の影響の大なるを知るべし。『一等國』は自惚也。慢心之に伴ひ、惰氣も之に伴ふ。『日本男兒』は自信也。

自から勵み、自から戒む。嗚呼男兒豈に自から侮るべけむや。今日の我國の一部に、『一等國』を振りまはして自から驕るものあるは、事實也。余をして曰はしむれば、これ却つて『日本男兒』の觀念なきに由る也。苟くも『日本男兒』の觀念あらば、自から侮らざると共に、妄りに他を侮らず、小成に安んぜず、猛進して止まざるべき也。『一等國』を振りまはすものあるにつけても、『日本男兒』の觀念が益必要也。今の留學生こそ、或は『日本男兒』の觀念なき者なれ。明治維新前後の留學生には之ありき。溯りて上古支那に留學せしものにも之ありき。『日本男兒』の觀念ありたればとて、自から驕りしにはあらず、熱心に先進國の長所を學べり。學びて摸擬に止まらず、出藍を期して、我國の文明を進めたりしも也。今日とても、『日本男兒』の觀念あれば、ある程、先進國に學びて我國の進歩を圖るべき筈也。先進國を侮りて、自から落伍者

となるべき筈のものにあらざる也。

人又曰はむ、日本人は文明國民中、最も語學に拙き國民也。其上に、『日本男兒』を振りまはしては、ます〳〵語學に拙なるべし。語學に拙なるが爲めに、外國に行きても、外國人と交際することは能はず、孤立して日本人同士のみにて相集まり、いはゆる『鄉に入りて鄉に從ふ』を得ざるにあらずやと。

成程、日本人は語學に拙也。啻に外國語に拙なるのみならず、自國の語も拙也。こは文明國民としての一缺點に相違なし。されど、べら〳〵饒舌るものは、必ずや、輕薄才子、三百代言、若くは幇間的人物也。ひとかどの人士は、妄りにべら〳〵饒舌るものに非ず。論語に『君子は口に訥にして、行に敏なり』の語さへあるに非ずや。西諺にも、『雄辯は銀なり、沈默は金なり』と云へるに非ずや。されど、全く對話する能はずして、稠人の中に度外視

せらるべくもあらず。要領を得たる饒舌り方を爲すは、紳士の一資格也。而してこれ單に口舌の問題に非ず、實に理解力の問題也、智識の問題也、趣味の問題也。苟くも理解力ありて智識ひろく、趣味深からば、辯舌も自から要領を得べし。下りては、舌の問題もあり、耳の問題もあり、舌の廻はし方にも練習を要す。且つ場慣れといふことも必要也。

耳と舌とは、大なる關係あり。全たく耳の聞こえざる人は、全たく言を發すること能はず。卽はち啞者也。耳が聞こえても、之を修養せざれば、微妙なる音樂を聞き分くること能はず。これ唱歌が今日小學校及び中學校の課程となれる所以也。孔子の學課にも、禮樂射御書數あり。樂は、卽ち音樂也。如何に野蠻なる人種とても、音樂の無きは無し。三味線は我國獨得の樂器にて、德川時代に創造せられたるもの也。其靈妙なること、世界に比なしと

稱せらる。されど、三味線に合はす歌謠には鄭聲多く、往々士君子をして耳を掩はしめたれば、おもに下流に行はれて上流に行はれず。武士一般の音樂は、謠曲なりき。書生一般の音樂は、詩吟なりき。全く音樂なきにあらざれど、敎育は武に專にして、文之に次ぎ、音樂の敎育は、輕く視られて普及せざりき。かくて耳が鈍也。從つて舌も鈍ならざるを得ず。今日の唱歌は、卽ち此缺を補はむとするもの也。今後の人士は、優柔惰弱若しくは淫靡に陷らざる範圍に於て、音樂に耳を養はざるべからず。試に耳と舌と關係する例を擧げむに、日本人中、土佐の人は發音が最も正し。『見ず』の『ず』を『水』の『づ』と明かに言ひ分ち、『富士』の『じ』を『藤』の『ぢ』と言ひ分つ。されど、關東の人を始め、多數の人は、『じ』と『ぢ』、『ず』と『づ』との區別を言ひ分くること能はず。啻に『ぢ』と『づ』とを言ふ能はざるのみならず、發音して聞かしても

耳が之を聞き分くる能はざるもの多し。『じ』と『ず』の場合は、舌を輕く上齒に當て、『ぢ』と『づ』の場合は、舌を强く上顎に當つれば、正しく發音するを得べし。初の程は、耳之を聞き分くる能はざるもの多けれども、修養すれば、聞き分くるを得るやうにならむ。日本人の外國語に拙なるも、之に似たるものあり。されど是れ修養の如何に因ることにて、決して能不能の問題にはあらざる也。

日本人が外國に行きて、孤立的なるは、言語の自由ならざるよりも、むしろ風俗の相違甚しきに由るべし。むかし豐臣秀吉の明國を征せむとするや、或人、漢文を能くする者を從へよと言ひけるに、彼をして我國語を用ゐしめむのみと大言したりき。されどこれ理想也。實際には通譯を用ゐざるを得ざりき。今日の日本國民とても、秀吉の理想を有せざるべからざれども、實行の出來ざ

る理想は空想に過ぎず。惜むらくは、日本國民の世界に發展することが後れたりき。日輪英國の領土に落つることなしと云はれしだけありて、英語最もひろく世界に行はる。されど、英語を世界の通用語となすは不可能なるべし。エスペラント語の勢力、今猶微々たれども、終には世界語として通用せらるゝの日あらむ。國語終局の發展は、エスペラント語に讓りて、今の處、英米に行くものは、英語に達せざるべからず。佛國に行くものは、佛語に達せざるべからず。獨逸に行くものは、獨逸語に達せざるべからず。然らざれば、行く甲斐なければ也。言語のみに非ず、行きたる國の禮儀作法をも辨へざるべからず。異なりたる風俗なりとも、忍ぶべきことは忍ばざるべからず。日本人は往々裸體になる爲めに歐米人に擯斥せらると聞く。裸體になることは、歐米の禮儀作法に合はざるのみならず、我國の禮儀作法にも合はざる也。唯我國

は暖國なるを以て、親しければ親しき程、地位が下れば下る程、大目に之を見るといふだけの事也。これも社會の全部にはあらず。侍たる者は如何に暑くとも、決して肌を脱がざりき。今日とても此遺風を守るもの少なからざる也。其他何事にても、外國に行きて、外國人の感情を害する言行を爲すべきに非ず。支那人は從來外國に行きても、『中華』を振り廻したりしが、革命以後、自惚の夢終に覺めたり。辮髪を切りて、洋服を纏ふに至れり。『日本男兒』は、豈に固陋なる支那人の態度を學ばむや。外國に行けば、外國語に熟達する也。外國の禮儀に背かざる也。妄りに外國人の感情を害せざる也。卽ち鄕に入りて鄕に從ふ也。

一時西洋崇拜の弊、其極に達したりし時、英語を以て國語となさむと唱ふるものありしが、こは斷じて不可也。外國に行きて、外國語を用ゐることは、國民の體面を汚すものにあらざれども、

他國語を以て我國語と爲すに至らば、獨立國の實何くにか在る。我國上古漢音を入れて、國語の豐富を圖りたり。されど、支那語を國語とはせざりき。さらば今日羅馬字を入るゝことは如何にぞといふに、羅馬字を入れずとも、我國獨得の假名あるに非ずや。其假名が專用せられざるは、漢字の不便も多けれども、その便利も多ければ也。今日直ちに漢字の使用を廢すれば、なほ目の明きたる人の目を掩うて歩かしむるが如し。余は今の處、成るべく、漢字の數を減少せむことを主張するもの也。

人又曰はむ、我國が世界の文明と競爭とに後れざらむとせば、親しく外國の事情に通せざるべからず。外國語に通せざるべからず。外國新刊の書籍雜誌新聞を讀破せざるべからず。然るに『日本男兒』を標賞すれば、この點に於て發展を妨ぐるに非ずやと。若し『一等國』を振りまはして慢心すれば、或は然らむ。されど

『日本男兒』は、外國の刺擊を排斥するものに非ざる也。今の世、政治にまれ、實業にまれ、教育にまれ、軍事にまれ、文學にまれ、藝術にまれ、哲學にまれ、科學にまれ、足、外國の地を踏まざるものは、何處へ顏を出しても、肩身が狹く感ぜざるを得ざる也。歌人は居ながらにして名所を知りし時代もありしかど、今日居ながらにして、外國の事情に通ずるは、不可能の事也。譯書に由りて外國の書を讀むは、隔靴搔痒の感あり。せめて原書が讀めずんば、大きな口は開かれざるべし。『日本男兒』豈に外國語の素養を忽にせむや。『日本男兒』は世の進歩に後るゝを甘んずるものに非ず。外國語に通ずる也、外國の書を讀む也。外國の事情を知る也、外國の人情を知る也。されど、日本の男兒は『日本男兒』也、神州男兒の血を傳へたる『日本男兒』也、日本に生れたる『外國男兒』にはあらざる也。

四　日本人と日本男兒

余は『日本人』と云はずして、『日本男兒』といふ。これ女子を度外視したるに非ず。日本の女子は、『日本女子』たるべし。日本の男子は、『日本男兒』たらざるべからず。『日本人』だけにては、物足らざる也。賴山陽が元寇を咏じたる詩に曰はずや、『嚇二得趙家寡與レ孤、持レ此來擬男兒國』と。げに男兒の國なる哉。宋朝の孤兒と寡婦とこそは、蒙古王に一蹴せられたれ、男兒國の男兒、蒙古の大軍を恐れむや。相模太郎は、『日本男兒』の標本也。當年の男兒は上下一般に『日本男兒』なりき。漢の三傑の一なる張良は、其貌婦人に似たりと傳へらる。張良はその貌こそ婦人に似たりけれ、國家に報せむが爲めに、巨萬の財産を犧牲にして多く客に結び、東海に壯士を得て、鐵槌を始皇の車に投ぜしは、千古の快男

兒に非ずや。漢の高祖を見拔きて之を利用し、謀を帷幄の中に回らし、勝を千里の外に決せしは、百代の英雄に非ずや。男兒は男兒らしかるべし。斷じて女子らしかるべからず。

男兒は、男兒の長所あり。女子は、女子の長所あり。生理上、男女の區別あるが如くに、男兒は男兒の任務あり。女子は女子の任務あり。男女の間、優劣を爭ふべきものに非ず。唯男性的に過ぐる女子は、男兒を生むに於て必ずしも無意味にあらざるべく、女性的に過ぐる男兒は、女兒を擧ぐるに於て、必ずしも無意味にあらざるべけれども、男らしき女子は女子の任務を果す能はず、女らしき男兒は、男兒の任務を果す能はざる也。動物に在りては女性は直接子孫蕃殖の任に當り、男性は、內、保護の任に當り、外、防禦の任に當る。人間となりては、固より動物と同視すべからざれども、要するに、女子は己を磨きて、能く家を治め、能く子女

を育つれば、先づ其任務を果したるもの也。男子は進んで國家の運命を負はざるべからず。男兒振へば、國家振ひ、男兒振はざれば、國家滅亡す。滿洲の野の碧血未だ乾かざるに、國民早くも太平の春に醉へり。干戈を執つて露國に克ちたるも、北歐の思想に蹂躙せられむとす。放縱となり、懷疑となり、新を追うて利己に墮し、奇を求めて肉慾に陷り、道德を無視し、國家を無視し、黃金の前に節義なく、利害の外に理想なく、光明なく、廉恥なく、意氣地なく、正義なく、國家の運命を負ふべき任務を忘れて、煩悶に泣き、奮鬪の氣力なくして、生活難に弱音を吐き、物質の文明に眩惑して、精神の文明は退歩し、男子の氣風一般に弱くなり、小さくなり、小利口になり、偏狹になり、卑俗になれるは、今日の現狀也。この現狀が增長すれば、日本國の前途は危い哉。

起てよ『日本男兒』。日本國は山陽の所謂男兒國也。開闢以來、

未だ曾て外國の爲めに汚されざる也。天つ日嗣は、天壤と共に無窮なる也。尨大なる支那、今や混沌を極めて、東洋に獨立國の體面を全うせるは、唯我國のみ也。米や東よりし、露や北よりし、獨や、英や、いづれも利牙を東洋の天地に試みむとす。東洋の安危は實に日本國の振否如何にあり。之を文明史上に見るも、我國は印度より支那より文明を入れて、之を咀嚼したり。近世に至りて、更に西洋の文明を入れたり。東西の文明を打して一丸となすの地位にあるものは、世界中唯日本國あるのみ。日本國民の任や重く、日本國民の前途や多望也。列强の壓迫甚しと云ふ勿れ。由來國家は外患あるの日に亡びずして、太平無事の日に亡ぶ。德川幕府は、三百年の太平無事に亡びたり。而して外患に因りて、明治以來の新日本は勃興したり。當時の男子は『日本男兒』なりき。國難に殉したり、忠義の犧牲となりたり。擧國一致して、外

患を排し、僅々數十年の間に、古今東西未曾有の發展を遂げたり。古來忠君の念に富み、又愛國の念に富めるが、最も盛に忠君愛國の精神を發揮したるは、この時代を第一とす。三千年來涵養せられたる『日本男兒』の精神、茲に迸り出でたり。この精神少し緩めば、國力少し衰へ、大に緩めば、國家は滅亡すべし。『日本男兒』の意氣地を失へるものは曰く、自覺したりと。これ個人として自覺したるつもりかも知れざるが、日本の男子は『日本男兒』として自覺せざるべからず。家を離れて人なく、國を離れて家なし。個人として自覺するも可也。更に家を加へ、國を加へて、國民として自覺せざるべからず。これ眞の人たるもの、自覺也。自覺せよ、自覺せよ、眞に自覺したるものは『日本男兒』たらざるを得ざる也。

五　男兒の觀念

借問す、今の青年の士、男兒といふことに就いて、如何なる觀念を有するか。英語の『マン』は、男のことにもなり、人のことにもなる。人が男か、男が人か。女の『ウーマン』は、『ウイフ、マン』也、卽ち人の妻也。東洋にては、人は人、男は男、女は女なるが、女人の語あり、人妻の語ありて、女には往々人が加はる。之を字形より見るに、男は田の力也。男に『マ』を加ふれば、『勇』となる。女に『又』を加ふれば、『奴』となり、亡を加ふれば、迷妄の『妄』となり、夭を加ふれば、妖怪の『妖』となり、干を加ふれば、いつはりの『奸』となり、旱を加ふれば、たかぶるの『焊』となり、鬼を加ふれば、はづるの『媿』となり、兼を加ふれば、きらひの『嫌』となり、眉を加ふれば、こぶるの『媚』となり、兪を加ふれば、ぬすむの『媮』となり、疾を加ふれば、ねたみの『嫉』となり、曼を加ふれば、あなどりの『嫚』となる。女三人寄れば

『姦』しとは、世に言ひふるされたる所、辰を加ふれば、妊娠の『娠』となる。これは男には出來ぬ藝當也。古詩に、『男子可憐蟲、出門抱二死憂一』の句あり。男子は門を出づれば、いつ殺さるゝかも知れず、實にかはいさうなものなりとの意也。謝疊山の詩に、『南八男兒終不屈、皇天皇土眼分明』の句あり。南八とは、南氏の八男也。即ち南霽雲の事也。南霽雲は張巡と共に義兵を擧げ、兵盡き、食盡き、力盡きて、張巡と共に捕へらる。張巡、南八を顧みて、南八よ、男兒唯死あるのみと勵せば、心配し給ふなとて從容として死に就けり。男兒の語は斯る場合に、強き響あり。平野國臣と生野の銀山に義兵を擧げたる長州の志士、南八郎は、霽雲の南八より、姓名を取りたるのみならず、精神までも取りたる也。

余は茲に我國の和歌に就いて檢する所あらむとす。和歌は日本

獨得のもの也。輸入品には非ず。神代の昔より始まりて、緜々として絶えず。その間、多少の變遷あり。殊に萬葉集と古今集以後の歌集とは、截然たる區別あり。一言すれば、萬葉集は、男の手振り也。古今集以後は女の手振り也。平安朝は太平の世也。文化爛熟せり。優美の極、柔弱となれり。堂々たる男子が戀に浮身をやつしても恥とは思はず、歌の上には、幾んど男女の區別なし。平安朝の歌人は、男にして男らしきものあらず。女は當年の所謂新らしき女也。『男子』『丈夫』等の語は一つも歌の上に出でず。足利の頃になりて、ぼつ〳〵之を見る。

◎丈夫が小坂の道も跡たえて雪ふりにけり衣かせ山（續後撰集）
◎丈夫が夢の編笠打たれて目をも合せず人ぞなり行（續千載集）
◎丈夫は山田のいほに老いにけり今いく秋にあはむとすらむ
（金葉集）

丈夫が山かたつきて住む庵の外面にわたす杉の丸橋(風雅集)
丈夫はしか待つことのあればこそ繁き歎も堪忍ぶらめ(同)
丈夫や端山わくらむともし消ち螢にまがふ夕暗の空(同)
丈夫が現し心も我は無しよるひる云はず戀しわたれば(同)

二十一代の歌集中より、『男子』『丈夫』の語を檢し來れだ、唯以上の七首あるのみ。しかも唯『丈夫』の語あるだけにて、『丈夫』の意氣を歌へるにはあらず。風雅集に『丈夫』の語ある歌が四首あるは、珍とすべし。されど、最末の『丈夫が現し心』は、萬葉集より、その儘取りたるもの也。之に反して試に萬葉集を見よ、『男子』『丈夫』の語、到る處にあらざるは無し。目幾んど應接に遑なき位也。

父のみの父のみこと　はゝそばの母のみこと　おほろかに心つくして　思ふらむ其子なれやも　丈夫や空しくあるべき

梓弓

梓弓末ふりおこし　投矢もち千尋射渡し　劍太刀腰にとりはき　足引のやつを踏み越え　さしまぐる心さやらず　後の世に語りつぐべく　名をし立つべしも

丈夫は名をし立つべし後の世にき、續ぐ人も語りつぐがね

これ山上憶良の作也。丈夫の語を用ゐるのみにあらず、丈夫の意氣地を歌ひ出せり。男兒たる者、之を讀んで愉快には思はずや。

海ゆかば水づく屍　山行かば草生す屍　大君の邊にこそ死なめ　顧みはせじと言たてゝ　丈夫の清き其名を　古ゆ今の現に　流さへる親の子供ぞ

これ大伴家持の作也。日本の男兒、之を讀んで血は躍らずや、骨は鳴らずや。

男の子やも空しかるべき萬づ代にかたりつぐべき名は立たずして

千萬の軍なりとも言擧せず取りて來ぬべき男の子とぞ思ふ

丈夫の行くといふ道ぞおほろかに思ひて行くな丈夫の伴

世の中の常なきことは知るらむを心つくすな丈夫にして

丈夫の心おもほゆ大君のみことのさきを聞けば尊み

單に丈夫の語あるのみならず、歌全體が男の手振りにあらずや。

『丈夫がさつ矢たばさみ』とか、『丈夫の爭ふ見れば』とか、『丈夫の競狩する』とか、『丈夫の心ふり起し』とか、『丈夫の心もちて』とか、『丈夫の男さびすと劍太刀腰にとりはき』とか、丈夫の意氣地を發揮せるもの、一々擧ぐるに遑あらず。如何に丈夫なりとも、腸は鐵石に非ず。戀に拘はれては、案外もろきもの也。

丈夫や片戀せむと嘆けども醜の丈夫尙戀ひにけり

巖すら行き通るべき丈夫も戀といふことは後悔いにけり

丈夫の敏き心も今は無し戀の奴に我は死ぬべし

戀になやむにしても、平安朝の風流男のやうに、男兒の常とは思はず。男兒の身を以て、實に殘念なりとて、心中なほ男兒の意氣地を失はざるは、殊勝に非ずや。丈夫といふ觀念を堅く持して、打克ち難き戀に打克てる歌も少なからず。

劍太刀身に佩きそふる丈夫や戀てふものを忍びかねけむ

丈夫の心は無しに秋萩の戀にのみやもなづみてあらむ

いづれも反語を用ゐて、戀を打消しける也。萬葉時代には、まだ歌詠む『男兒』ありき。殊に『日本男兒』ありき。平安朝以後、歌詠む『男兒』無くなりしこそ慨かはしけれ。唯鎌倉時代に、一の賀茂眞淵ありき。今の世になりては、全く歌詠む『男兒』なきに非ずや。男性にして歌詠むものは無しとせず。されど、歌人を以て標置する者、若しくは歌人の卵とも云ふべき者にて、絶えて『男兒』なき也。

歌は人心の反影也。萬葉集の歌人が、『丈夫』をふりまはしたるは、『男兒』が歌を詠みたれば也。平安朝以後、『男兒』はあれども歌は詠まず。歌を詠みたるは、文化中毒の弱々しき貴公子也。若しくは世捨人の僧侶也。若しくは女子也。歌は詠むべし。されど『日本男兒』豈に文化中毒の貴公子に摸倣すべけむや。歌を詠まむとならば、何よりも先に萬葉集を讀め。萬葉集を讀みて、己れ先づ『男兒』となれ。

徳川の末、外難迫り來るに及びて、『男兒』が社會の表面に活躍し出せり。『我は武士也』が中流一般の男子の信條なりしも、太平の武士、いざと云ふ場合には、さつぱり武士らしからず。『我は武士也』にては、間に合はざるやうになりて、『男兒』茲に復活せり。『男兒』だけにては不十分也。神州を冠し來りて、『神州男兒』が、當年の有爲の男兒に共通せる信條となりき。この際の詩に、『男兒』の語多きこと、萬葉集と前後相呼應す。

◎男兒立レ志出二鄕關一　學若不レ成死不レ還
埋骨豈期墳墓地　人間到處有二青山一』
◎去歲王師迫二我境一　今朝孤劍入二他鄕一
回レ頭世事變如レ夢　一片依然◎男子腸』
◎幾經二辛酸一志始堅　◎丈夫玉碎恥二瓦全一
我家遺法人知否　不レ爲二兒孫一買二美田一』
兵氣衰頹事既窮　翻然代レ衆殺二玆躬一
獨羞一片男兒骨◎　不レ曝二白沙青草中一』
曠世奇才欽二兩賢一　行藏易レ地業皆然
氣節千秋出師表　清高萬古去來篇
苦辛本識由二三顧一　勇退無レ心戴二二天一
◎男子功名應レ若レ是、　縱敎一醉曲レ肱眠』

精忠滿腹日本魂　日本刀寒一條水
誓斬二犬羊一爲二兩斷一　男子國中眞男子
願得三袈裟代二甲冑一　羽扇指揮防二外寇一。

『男兒』の語ある詩、擧ぐれば果もなし。今一つ安積武貞の詩を錄して、打留とせむ。

◎◎日出國兮有二名寶一　百錬精鐵所二鍛造一
光鋩電閃夏猶寒　風蕭々兮髮衝レ冠
請看日出男兒膽　踏二白刃一兮犯二砲丸一
犯二砲丸一兮陷二堅陣一　縱横搏擊山岳震
有二死之榮一無二生辱一　不レ須將臺受二約束一

安積の詩には、『男兒』のみならず、『日出國』を提出し來れり。

當年男子中の男子の胸には、『日本男兒』の念、共通して燃えたりき。外難に逢ひて氣益振ひ、刀鋸に對して心益勇み、『男兒』の

鮮血を以て、日本今日の新天地を開き出せり。之を前にして藤田東湖、之を後にして吉田松陰、男兒中の『男兒』、否『男兒』中の第一流なるが、いづれも正氣歌より出でたるか、『日本男兒』が猶一層具體的になれり。文天祥は、

在レ齊太史簡、　在レ秦張良椎、
在レ漢蘇武節、　在レ晉董狐筆、
爲二張睢陽齒一、　爲二稽侍中血一、
清操厲二冰雪一、　爲二嚴將軍頭一、
或爲二渡江楫一、　爲二顏常山舌一、
逆堅頭破烈、　或爲二遼東帽一、
或爲二出師表一、　鬼神泣二壯烈一、
慷慨呑二胡羯一、　或爲二擊レ賊笏一、

とて、直筆して死したる齊の太史、筆を曲げざりし晉の董狐、始皇帝の車に鐵椎を擲ちし張良、匈奴に屈せざりし蘇武、斷頭將軍あるも降將軍なしとて、白刃の前に自若たりし嚴顏、身を以て晉

帝を衞りし稽紹、唐の安祿山の亂に義を唱へし張巡と顏眞卿、遼東に淸節を保ちし管寧、出師表を上りし諸葛孔明、中原を淸めずんば生きて再び大江を渡らずと誓ひし祖逖、笏を奪つて逆賊朱泚を擊ちて節に死せし段秀實の十二烈丈夫を數へ來りて、己れも其精神を續がむことを期せり。眞男兒の精神は、古今なく、東西も無し。藤田東湖の正氣歌に曰く、

天地正大氣、粹然鍾二神州一、
巍巍聳二千秋一、注爲二大瀛水一、
發爲二萬朶櫻一、衆芳難二與儔一、
銳利可レ斷レ鑿、蓋臣皆羆熊、
神州孰君臨、萬古仰二天皇一、
明德侔二太陽一、世不レ無二汚隆一、
乃參二大連議一、侃侃排二瞿曇一、
秀爲二不二嶽一、
洋洋繞二八洲一、
凝爲百鍊鐵一、
武夫盡好仇、
皇風洽二六合一、
正氣時放レ光、
乃助二明主斷一、

焰焰焚二伽藍一、中郎嘗用レ之、
淸丸嘗用レ之、妖僧肝膽寒、
虜使頭足分、忽起二西海颶一、
志賀月明夜、陽爲二鳳輦一巡、
又代二帝子一屯、或投二鎌倉窟一、
或伴二櫻井驛一、遺訓何慇懃、
幽囚不レ忘レ君、或守二伏見城一、
昇平二百歲、斯氣常得レ伸、
生二四十七人一、乃知人雖レ亡、
長在二天地間一、隱然敍二彝倫一、
卓立東海濱、忠誠尊二皇室一、
修文與二奮武一、誓欲レ淸二胡塵一、
邦君身先淪、頑鈍不レ知レ機、
宗社磐石安、忽揮二龍口劍一、
怒濤殲二胡氛一、芳野戰酣日、
憂憤正慎慎、或殉二天目山一、
一身當二萬軍一、然方二其鬱屈一、
英靈未二嘗泯一、孰能扶二持之一、
孝敬事二天神一、一朝天步艱、
罪戾及二孤臣一、

孤臣困ニ葛藟一、君寃向レ誰陳、孤子遠ニ墳墓一、
何以謝ニ先親一、荏苒二周星、獨有ニ斯氣隨一、
嗟予雖ニ萬死一、豈忍ニ與レ汝離一、屈伸付ニ天地一、
生死復奚疑、生當雪ニ君寃一、復見レ張ニ綱維一、
死爲ニ忠義鬼一、極天護ニ皇基一、

佛敎を排斥せし物部守屋、佛寺を燒き拂ひし欽明天皇、入鹿を誅せし中臣鎌足、神勅を奏せし和氣淸麿、元の使者を斬りし北條時宗、後醍醐天皇に代りて叡山に上りし藤原師賢、護良親王に代りて吉野に討死せし村上義光、鎌倉の土窟に恨を呑みし護良親王、櫻井驛にて子に遺訓せし楠正成、武田勝頼に殉せし小宮山友信、伏見城を死守せし鳥居元忠、君讐を報いし赤穗四十七士、皆是れ變に處して正氣の人に寓せしもの、卽ち東湖の仰ぐ具體的の『日本男兒』也。吉田松陰の正氣歌に曰く、

正氣塞ニ天地一、聖人唯踐レ形、其次不朽者、
亦爭ニ光日星一、嗟吾小丈夫、一粟點ニ蒼溟一、
才疎身則陋、雲路遙ニ天廷一、然庸ニ其送レ東、
眼與ニ山水一靑、周海泊レ舟處、敬慕文臣筆、
嚴島鏖レ賊地、仰想武臣節、赤水傳ニ佳談一、
櫻留義士血、和氣存ニ郡名一、孰捫ニ淸丸舌一、
壯士一谷笛、義妾芳野雪、墓悲楠子志、
城仰豐公烈、倭武經ニ蝦夷一、田村威ニ靺鞨一、
嗟此數君子、大道補ニ分裂一、尾張連ニ伊勢一、
神器萬古存、琵琶映ニ芙蓉一、嵩華何足レ論、
最是平安城、仰見天子尊、神州臨ニ萬國一、
乃是大道根、從ニ墨夷事起一、諸公實不レ力、
已破ニ妖敎禁一、議レ港洲南北、天子荐軫念、

四海妖氛黑、奉レ勅三名侯、鷄栖鳳凰食、
其他憂國者、亦皆溝中瘠、
世事幾變易、幸有二聖公在一、欽忽五六歳、
如何將軍志、曾不レ拂二妖賊一、足三以興二神國一、
孰惑レ辨二黑白一、人生轉瞬耳、大義自炳明、
聖賢雖レ難レ企、吾志在二平昔一、天地何有レ極、
聊添二山水色一。願留二正氣一得、

これ松陰が捕へられて江戸に送られし時の作、經過する土地によりて、具體の『日本男兒』を聯想せり。周防の海に舟を泊せし文臣は、何人にや。嚴島に賊を慶にせし武臣は、毛利元就也。赤穗を過ぎては四十七士を思ひ、和氣郡を過ぎては和氣清麿を思ひ、一谷に熊谷直實を思ひ、吉野山の方に向つて靜御前の貞節に思ひ及ぼし、湊川を過ぎて楠公を思ひ、大阪を過ぎては豐太閤を思ふ。

德川將軍武斷なくして、洋夷跋扈せる世の中、思を上古に馳せて日本武尊と田村將軍とを思ひ起さゞるを得ざりき。明治の世になりては、日露戰爭に軍神と謳はれし廣瀨中佐にも、正氣歌あり。

死生有レ命不レ足レ論、鞠躬唯應レ酬二至尊一、奮躍赴レ難不レ辭レ死、
從容就レ義日本魂、一世義烈赤穗里、三代忠勇楠子門、憂憤
投レ身薩摩海、慷慨就レ刑小塚原、或爲二芳野廟前壁一、遺烈千
載見二鏃痕一、或爲二菅家筑紫月一、詞存二忠愛一不レ知レ寃、可レ見
正氣滿二乾坤一、一氣磅礴萬古存、嗚呼正氣畢竟在二誠字一、呶呶何
必要二多言一、誠哉誠哉斃不レ已、七生二人間一報二國
恩一、

赤穗四十七士、楠公、菅公、薩摩灘に投せし西郷隆盛、如意輪堂に辭世の歌を留めし小楠公、慷慨國を憂へて小塚原の露と消えし吉田松陰、橋本左内、賴三樹三郎など、廣瀨中佐の具體の『日本

男兒』なるが、斯く正氣歌を作りし東湖や松陰や廣瀨中佐や、何れも皆『日本男兒』ならずんば非ざる也。

六　日本國の觀念

大正二年の夏、われ鹿野山上に寓せしことあり。神野寺といふ大伽藍を中心として、東は一段低く、西は一段高し。その高き處を上町と稱し、低き處を下町と稱す。いづれも數十の人家、兩側に並ぶ。試に下町を歩くに、眼界は數町以内に限らる。土質と云ひ、人家の樣と云ひ、海邊の農村とのみ思はれて、千二百尺の峯上にありとは思はれざる也。されど、歩して九十九谷に至れば、總房幾百の山谷脚下に展開して、こゝに始めて身の山上にあるを知る。山上は夏涼しくして、幾んど暑さを知らず。東京の溫度に比すれば、十度以上の差あるべし。その涼しきことも、東京の暑

熱に苦しみ來つて、始めてそれと知らるゝ也。殊に天下に山は多けれども、頂上に平地あるは、關東にては、唯一の鹿野山あるのみ。若しも鹿野山の下町に生れて、一歩も下町の外に出でざるものあらば、其身山上にありとは知らざるべく、山上の涼しきことをも知らざるべく、鹿野山が頂上に平地を有する點に於て、天下無類なることをも知らざるべし。日本に生れて、日本の難有さを知らざるものは、なほ鹿野山の下町に生れて、一歩も下町の外に出でざるものに似たらずや。

日本に生れたる者は、請ふ先づ日本の歷史を讀め。次に世界萬國の歷史を讀め。然る後、日本の歷史を世界萬國の歷史に比較して見よ。日本は開闢以來、萬世一系の天皇を戴くことに於て、世界萬國に比類を見ざる也。天照大神、天孫に三種の神器を授けて宣給はく、これを視ること猶我を視るが如くせよ。寶祚の隆、天

壤と共に無窮なるべしと。かくて天孫は日向の高千穗の峰に天降り給ふ。嗚呼、我國の開闢、何ぞ崇高にして雄大なるや。世界萬國の開闢は、すべてみな大、小を併せ、強、弱を壓し、力と德とあるもの、自から立ちて人民を支配せざるは無し。力と德とある間は帝王なるが、力と德と盡くれば、他の力と德とあるものに代らる。革命又革命、その盡くる所を知らず。獨り我日本は開闢以來、君臣の分定まれり。君臣義ありとは、支那にて言ふと也。我國の君臣は情誼に合す、親子の關係あり。又宗家と別家との關係あり。切つても切れぬ仲也。近き頃の大逆事件は、發作的狂人の所暴也。固より常識を以て評すべき限りに非ず。古くして、佛敎旺盛を極め、天皇すら三寶の奴と自から下り給ひし世には、神器を覬覦せし妖僧ありしも、神勅を奉ぜし淸麿の一言、よく妖僧の膽を破りて、國家を泰山の安きに置けり。國史上の汚點と云はゝ汚

點なれども、事、未發に收まりて、實行に至らず。天皇は萬世一系也。天皇は開闢以來の天孫也。天皇に姓なきも、世界萬國、ひとり我國にのみ見る所也。歐洲には、立憲君主國にてありながらなほ土地を私有する貴族の存するを見る。我國にては、維新の際三百諸侯、みな先祖代々の土地を奉還せり。これ外國の歷史には見難き所也。德川慶喜が何の造作もなく大政を奉還し、西鄕隆盛と勝安房と談笑の間、江戸城が明け渡されたるも、實に萬世一系の天皇を戴ける日本獨得の國體なればこそ也。古人曰く、兄弟墻に鬩げども、外、其侮を禦ぐと。日本國民は、時に相爭ふことありとも、天皇に於て、何人も一致す。天皇の御爲めには、一身なく、一家なし。一朝事あれば、日本國民は、何人も義勇公に奉ず。これ、日本獨得の國體に基づける日本國民の特長也。外國には見るべからざる所也。

日本は萬世一系の天皇を戴ける國なると共に、神の國也。天皇は現つ神也。皇祖皇宗は神也。死に事ふることなほ生に事ふるが如しとかや。現つ神崩じ給へば、依然として神也。日本國民の崇敬心は、現在に留まらずして過去に及ぶ。天照大神は皇室の神にして、かねて日本國民の神也。忠君の日本國民は、又自から敬神の日本國民也。佛敎隆盛を極むるに至りたるも、日本國民が敬神の念は、牢として拔くべからず。佛者こゝに本地垂跡の說を立て神佛を混合して、日本國民の信服を博したりき。基督敎のゴッドを神と譯すれども、我國の所謂神に非ず。基督敎が佛敎の如く普及せざるは、其神が日本の神と異にして、日本の國民性と相合せざることが、一大原因ならずんばあらざる也。

世界萬國は、人民ありて然る後、君王ありき。獨り日本は、皇室ありての國家也、人民也。世界萬國は忠君と愛國と相一致せざる場合多けれども、日本にては、古來、忠君卽ち愛國也。愛國卽ち忠君也。日本の國家は家族制の發達したる國也。皇室は宗家にして人民は別家也。人民の君に盡すは、卽ち親に盡す也。世界萬國には、孝と忠と相一致せざる場合多けれども、日本にては、忠孝全く相一致す。平重盛曰く、忠ならむと欲すれば孝ならず、孝ならむと欲すれば忠ならずと。この言を皮相に觀察すれば、重盛は忠孝の分岐點に迷ひし如くなれども、實は然らず。重盛は斯く言ひて、父を諫めしのみ。父をして非を遂げざらしむるが、重盛にありては、孝也。兼ねて忠也。而かも重盛は一時父を欺きてまでも、孝道を全うしたりき。兼ねて忠道を全うしたりき。

支那國民は孝を解す。親老ゆるの故を以て君に事へざる賢臣も少なからざりき。歐米には、高等敎育をうけたる紳士にても、なほ孝を解せざるもの多し。孝が忠と全く相合することは、日本獨

特の國體也。支那にも無ければ、西洋にも無し。元來、開闢が天皇ありての國家也。故に忠君は愛國と合し、敬神と合し、孝道とも合す。殊に我國の敬神は、私福を祈るが如き宗教的觀念あるに非ず。實に始に反り、本に報ずる人間の大道を發揮するもの也。

『何事のおはしますかは知らねども、かたじけなさに涙こぼるゝ』と西行法師は咏じたりけむ。西行ならずとも、伊勢神宮に詣づる日本國民は、何人もこの感なきを得ざるべし。

有史以來、こゝに三千年、時に汚隆あるを免れざりしも、日本國民の歷史は、進取の歷史也。活動の歷史也。世界萬國、日本の歷史が獨り金甌無缺の歷史也。天孫降臨となり、神武天皇の東征となり、日本武尊の西討東伐となり。神功皇后の三韓征伐となるなど、日本上古史は、何ぞ勇ましきや、今日にありても、天皇は卽ち大元帥におはす。兵馬の大權を臣下に委ね給はざるが、我國

上古の制也。所謂勇將の下に豈に弱卒あらむや。調伊企儺新羅の軍に捕へられ、日本の方に臀を向け、日本王我臀を喰へと言はゞ一命を助けむと命ぜられたるが、伊企儺屈せず、新羅王の方に臀を向け、新羅王我臀を喰へと叫びて、自若として死に就きたるが如き、當年の日本男兒を代表して、千載の下なほ人をして肉躍り血涌かしむ。推古天皇の朝、使を隋に通ずるに方りても、『日出處之天子、致二書日沒處之天子一、無レ恙否』の文句を用ひたりき。但しこの文句は、支那の史に見えて、日本の史には見えず。思ふに、使者の考にて、氣焰を吐きたるものなるべし。何ぞ其意氣の壯なるや。元寇は神風の一掃にて事が濟みたるに非ず。幾度も我を威嚇したりき。幾度も攻め來れり。幾度も再擧を圖れり。前後數十年、我國民は奔命に疲れたるも、毫も屈せず。上には至尊の御身を以て國難に代らむと祈り給ふ聖帝あり。下には一刀兩斷を試み

て惑はざりし執權あり。擧國一致、虜人の足をして一歩も我國土を汚さしめざりしは、何ぞ壯烈なるや。南朝の遺類の鬱屈は、外に散じて、八幡船となりて、盛に支那の沿岸に氣を吐きたり。支那にては大に恐れて、この時より關帝廟を祀り始めたりと聞く。秀吉の朝鮮征伐は、其身死して、失敗に終りしも、なほ日本男兒の氣を吐くに足る。露國北邊を侵すに及びて、江戸二百年の閒眠覺め、米艦浦賀の戸を叩くに至りて、攘夷と叫び、尊王と呼び、櫻田の義擧となり、十津川の擧兵となり、生野銀山の擧兵となり蛤御門の戰となり。鳥羽伏見の戰となり、上野の戰となり、會津の戰となり、日本男兒の鮮血を以て、明治の聖代を現出せり。內亂は西南役に終りて、朝鮮に事あり。支那に克ち、露國に克ちて、明治の世の武勳、日本男兒の子孫たるを辱しめず。嗚呼何ぞ盛なるや。日本歷史を通覽し來れば、唯快男兒の活動を見て、一

點の屈辱をも見ざる也。

然れども、日本國民は血に渴する國民にあらざる也。我國もと細矛千足國の名ありき。武器の鋭利は、やがて國民性の鋭利を代表すれども、又一方に君子國の稱ありき。粟田眞人の唐に使するや、支那人見て、流石に君子國の人なりと感歎せりと聞く。日本男兒は腦力に於ても、世界先進國の後塵を拜するものにあらざる也。氣力の外に向はざりし時とても、徒に眠りしには非ず。內に向つて腦力を練りたりし也。江戸二百年の閒眠とは云ふものゝ、文を錬り、武を鍛へて、明治大正の聖世の土臺をつくりし也。日本男兒は戰爭に强けれども、唯徒に猛烈一方なるに非ず。義家が貞任と矢石の間に連歌したるを見よ。那須與市の扇の的を射たるを見よ。斯る勇ましくも又優しき戰記は、日本の外にはあらざるべし。山と云へば、國民一致して、八面玲瓏の富士山を指ざす

ずや。花と云へば、國民一致して、朝日に匂ふ山櫻を指ささずや。國民は幾んどみな歌か俳句かを作るに非ずや。世界に國民は多けれども、國民みな詩人なるは、唯日本あるのみ。到る處、山は青く水は清し。氣候は溫和也。人物は俊秀也。嗚呼東洋の孤島、地は狹けれども、天惠は多し。日本男兒の祖先は、こゝに活動せり。こゝに經營せり。こゝに骨を埋めたり。茫々數千年、活氣の迸る所、世界の氣運の促す所、明治以後の日本國民は、海外に發展せり。二千年來の宿題たりし朝鮮は、我有に歸せり。臺灣も我版圖に入れり。樺太の一半も我手に屬せり。南滿洲も我勢力範圍に在り。我國は一躍して世界の一大强國となりぬ。余は謹んで今の國民に告ぐ。なほ進んで未來の國民に告ぐ。今日我國が斯く强盛となりたるは、明治以後の國民の奮鬪の結果なれども、また祖先以來の日本男兒の努力の賜物たらずんばあらず。將來我國は益發

展せざるべからざるにつけても、日本男兒は益〻努力を大にして之を續けざるべからず。人は一代名は末代の語あるが、人は一代に非ず。我前に父祖あり。我後に子孫あり。人生は過去現在未來に亙りて、意義深し。國には、國の歷史あり。國民には、國民の性格あり。善あり、惡あり、貴あり、賤あり、富あり、貧ありて人はさま〴〵なるが、苟くも國民の中堅となるものは、國史を解して、國民性を傳へたるものならざるべからず。青年の士、往々一身の虛榮にあこがれ、一身の發展に急にして、國史と國民性とをよそにして、突飛を試みむとする者あれども、これ斷じて大成する所以にあらざる也。余は繰り返して云ふ、國史を讀み、諸外國の歷史と比較して、我國史の難有さを知れ。日本國には、古來一つの中心點あり。卽ち萬世一系の天皇也。日本の天皇は、天の下を知らせ給ふ。諸外國の君主の如く、侵略壓抑するにあらざる

也。日本の天皇は知らす也。諸外國の君主は、うしはく也。明の太祖の詩に曰く、『千里車書盡ニ混同一。乾坤豈有レ別ニ疆封一、提レ兵百萬西湖上。立レ馬吳山第一峯』と意氣壯なれども、これ天下をうしはかむとする也。歷山王や、那破翁や、古來天下をうしはかむとせし英雄は、多かりしも、みな失敗に歸せり。我天皇は、天下を知らさむとす。猶太陽出で〻普く國土を照すが如し。我國が太陽を國旗とせるも、深く故ある哉。天に太陽の光あり。地に日本天皇の德あり。この德を太陽の光の如く普く地球の上に布くことは、日本國の責任ならざるべからず。日本男兒の理想ならざるべからず。國と國との爭は、終に人種と人種との爭に歸するの日あるべし。人種と人種との爭も、終に地上の太陽の德に歸服するの日あるべし。今日の日本の中心點は、やがて東洋の中心點とならざるべからず。終に世界の中心點とならざるべからず。日本國

の前途は洋々たる哉。日本男兒の責任は重大なる哉。

奮起せよ、未來の國民。人に盛衰あり。國に興亡あり。われ古來の盛衰興亡の跡を案ずるに、人は失意の時に衰へずして、得意の時に衰ふ。國家の內憂外患の時に亡びずして、太平無事の時に亡ぶ。我國膨脹すれば、する程、外患大也。內憂も少なからず。然れども內外の憂患大なれば大なる程、國民の氣振ふ。氣の振ふ所、衰亡の乘ずべき隙なし。人或は曰はむ、日本は島國なるが故に、在來金甌無缺の歷史を保ち得たる也と。これも理由の一なるべけれど、米艦渡來以後は、島國と大陸との差別なし。日清戰爭に、日露戰爭に、日本は島國なるが故に勝ちたるにはあらざる也。島國は動もすれば、保守退嬰に傾く。然るに、日本は島國ながらも、早く支那の文明を入れたり。印度の文明を入れたり。歐米の文明をも入れたり。島國なるが故に、操守堅く、輕躁浮華

ならざるの美風あるべけれども、島國なるが故に、保守退嬰に失せざるのみならず、却つて進取的也。且つ開放的也。個々に觀察すれば、決して島國的ならざる也。富士山を目しては、三國一と云ひしに非ずや。三國とは、日本、支那、天竺の事にて、當年の世界全體也。三國を誤りて、駿河、甲斐、相模の三國に跨ると思ひ、扶桑第一の山などと云ひしは、德川時代の腐儒の見解に過ぎず。聟を取るにしても、國民一般には、三國一の聟と云へり。何ぞ氣宇の大なるや。鎖國の夢は、既に米艦渡來に破れぬ。日本は世界の日本也。東洋の孤島にはあらざる也。況んや、封土の既に大陸に接するものあるに於いてをや。

日本男兒にして國史を解し、國民性を失はざる限りは、日本は益〳〵膨脹せむ。益〳〵隆盛ならむ。若しも日本男兒にして、日本の歴史を忘れ、國民性消耗することあらば、數千年來續き來りし連鎖

茲に絶えむ。日本なる哉、〳〵、日本は神の國也。萬世一系の天皇の國也。金甌無缺の歴史の國也。世界の中心となる國也。日本に生れて、國を愛せざる者は、人にして人にあらざる也。國は兵少きが故に亡びず。又貧しきが故に亡びず。愛國心少なくなれば少なくなる程、滅亡に近づく。人或は曰く、日本人は愛國心强きに失す。外國の排斥を受くる所以なりと。嗚呼外國の排斥何かあらむ。外國の排斥を恐れて、愛國心を失はゞ、これ亡國の民のみ。日本男兒は勇往邁進、愛國に生死して、祖先以來の理想を貫徹せざるべけむや。

七　大和魂の本體

人心の異なれるは、其面の如しと云へり。人には、それ〴〵異なりたる氣質あり。陶宮術は、十二支によりて、それ〴〵氣質を

配合せり。子年の者は、鄙吝也。善用すれば節儉となる。丑年の者は、窒塞也。善用すれば縝密となる。寅年の者は、傲奢也。善用すれば弘惠となる。卯年の者は優惰也。善用すれば寛容となる。辰年の者は、忿恚也。善用すれば勉强となる。巳年の者は、媚嫉也。善用すれば公愛となる。午年の者は、浮躁也。善用すれば世話好となる。未年の者は、憂悒也。善用すれば明徹となる。申年の者は、狡黠也。善用すれば俊英となる。酉年の者は、梟奸也。善用すれば大智となる。戌年の者は、狠戾也。善用すれば强記となる。亥年の者は、執拗也。善用すれば正直となると言へり。人々其面を異にすと雖も、之をまとむれば、日本人はみな日本人の面也。佛蘭西人はみな佛蘭西人の面也。英吉利人はみな英吉利人の面也。國民の氣質も、亦國により、大別するを得べし。日本男兒の氣質に就いて、何より先に人の注目を惹くは、潔癖也。鄰り

の支那人は、不潔を以て有名也。支那の街頭は、大小便の垂れ流し也。歐米人は支那人ほどには不潔ならねど、日本人の如く便後手を洗ふことなし。鼻を拭むに、手巾にて拭み、拭みたるものにて又拭む。日本人の如く鼻紙を用ゐず。潔癖と云へば語弊あり。清淨を愛すと云へば、意味更に明かになるべし。本居宣長の歌へる、

敷島の大和心を人問はゞ
朝日ににほふ山櫻花

は、最も能く人口に膾炙せる歌なるが、解釋はまち〳〵也。櫻の潔く散ることを日本男兒の潔く死するに譬へたるなりと說く者もあれど、それならば、『朝日ににほふ』と言ふよりも、『夕風に散る』と言ふべき筈也。余を以て解釋すれば、この歌は、主として清潔を愛する日本男兒の特質を捉へたるもの也。清潔だけにては

少し不足也。明の字を加へて、明淨とでも言ふべし。『明窗淨机』と云へば、誰かすが〳〵しく思はざらむや。『明眸皓齒』と云へば如何にも美人なりと、誰も思ふべし。清潔に光明と溫味との加はりたるが、卽ち明淨也。一年中、櫻の咲く頃が最も溫味あり。一日の中にても、曙が最も明淨也。殊に春の曙と來ては、實に明淨の美を極む。花の中にては櫻、櫻の中にては山櫻が最も明淨也。天體にありては太陽が最も明淨なるが、その太陽も、朝の太陽が最も明淨也。今、山櫻が春の曙の太陽と映發するは、世にも明淨の粹が揃ひに揃ひたるものにて、これが大和魂の本體なりとは、さすがに本居翁の活眼なる哉。

本居宣長の師なる賀茂眞淵にも、

うら〳〵と長閑けき春の心より
にほひ出でたる山櫻花

といふ歌あり。日本男兒は、何人も櫻を愛することに一致す。單に花と言へば、櫻の事也。世界中、櫻は日本にのみ榮ゆ。菊や、梅や、牡丹や、ダリヤや、薔薇や、到る處にありて、到る處に愛せらる。櫻を愛することは、日本男兒の獨占也。櫻は散り易し。されど散り易きを云はゞ、罌粟もあるべし。日々、新聞の三面に現はる〻自殺者は、罌粟の類なるべし。眞の日本男兒は、死すべき時に潔く死ぬる也。義に死ぬる也。國難に死ぬる也。其死際の潔きは、櫻の散際の潔きが如し。されどそれが櫻花の粹にもあらねば、大和魂の粹にもあらず。明淨を愛することが本體となり居れば、生を捨て〻義を取ることも、身を殺して仁を成すことも、自から出づべき筈也。悲觀や厭世の餘に輕々しく死するは、男兒の恥辱也。死の尊ぶべきは、義を取るに在り、仁を成すに在り。日本男兒は、一般に義を取り、仁を成すが爲に、死を視ること歸

るがこし。日本兵の強きは、これに基づく。單に散り易きを櫻の色とし、死に易きを日本男兒の特色とし、死に易き日本男兒は散り易き櫻を愛すと云ふものあらば、これ日本男兒の本體を知らざる也。明淨の美、花に凝つて櫻となり、人に凝つて日本男兒となる。『櫻植ゑたり軍もしたりこれが眞の日本武士』と云へるも、『花は櫻木人は武士』と云へるも、明淨の美相契合する所あるを以て也。『世の中は三日見ぬ間の櫻哉』の句は、日本男兒の進歩に急なるにも譬ふべし。開國以來五十年間の發展は是れ也。されど日本男兒の文化は、櫻花の如く早く散るものならむや。

日本にて、單に山と云へば、富士山の事也。世界には富士山よりも高き山少なからざれども、富士山の如く形の正しき山は、富士山の外には無し。げに富士山は不二山也。唯形が正しきのみならずして、四時雪を戴けるを以て、富士山は其眞價を發揮し來る。

田子の浦ゆ打出て見れば眞白にぞ
富士の高根に雪はふりける

げに、山邊赤人は富士山の眞價を捉へ得たる哉。拔地一萬二千尺、箱根、足柄、愛鷹の諸山を脚下に控へて、直に東海に面し、四時雪を帶びて、八面玲瓏たるは、世にも明淨の美を極めたるものならずや。宗鑑の句に曰く、『元朝の見る物にせむ富士の山』と。富士山は、すが〳〵しき元旦の心と契合するのみならず、何時とても、明淨なる日本男兒の心と契合する也。富士山の美を一言にして盡さば、明淨也。明淨を愛する日本男兒、いかでか富士山を愛せざるを得むや。

日本の如く溫泉の多き國は、世界に稀なるべし。潔癖の日本男兒、いかでか湯治せざらむや。如何なる僻地にゆくも、戶々必ず風呂桶あり。市街をなせば、必ず錢湯あり。日本國民は一般に少

くとも、二三日間に一度入浴せざる者はあらざるべし。少くとも日本國民全體の三分一は、毎日必ず入浴するなるべし。これ世界無類の事にて、日本男兒の潔癖を發揮せるもの也。芳賀博士はその著國民性十論の中に、日本人入湯の事を記すること最も詳かなり也。茲に摘出せむに、

『日本人の樣に盛に全身浴をする國民は、外にはあるまい。東京市の湯屋は八百軒以上もあり。其外、中流以上の家には各湯殿があつて、百三十萬の住民の中、凡そ三分の一づゝは、毎日入浴する割合だといふことである。ベルツ氏は、日本の氣候、家屋の割合に、リウマチスの少いのは、全く日本人が錢湯を好む結果だらうといつて居る。

『獨逸人のドンネルスマークといふ人の書いた、日本及日本人といふ書の中には、日本人の入浴の事を賞揚して、これだけは

大に眞似すべき事と書いてある。伯林市などでは、公衆衛生の必要から、到る處に浴場を公設して、勞働者等の入浴を奬勵して居る。

『獨逸の中學の讀本に、日本人の記事を擧げて、入浴の事を記し、獨逸もむかし三十年戰爭までは盛に入浴したが、その戰爭の疲弊後、この風が廢つたので、これは復古すべき事であると書いてあるのも見た。』

日本人は一般に入浴を好めるが、江戸兒が最も甚しきが如し。殊に江戸兒は熱湯を好む癖あり。凡そ日本の都會中、東京の如く塵埃の甚しく飛散する處なし。從つて江戸兒が最も入浴を好むも自然の勢也。東京の如き塵埃の都にも、なほ平氣にて生存するを得るは、入浴の賜物なりと云はざるべからず。東京人士が箱根伊香保などと騷がずとも、毎日一時間を入浴に費さば、必ず健康な

るべし。水道の水で産湯をつかへりとは、江戸兒の誇りとする所なるが、日本國民は生れし時、湯にて身を清むるのみならず、死にたる時も湯棺とて、湯にて清めて、冥途の旅にたゝする也。

神社の前には、御手洗川あり。そは到る處の神社といふわけには行かざるが、神社の前には、必ず手洗鉢あり。寺の前にも、必ず手洗鉢あり。日本國民は、神佛を拜する前に、必ず手を洗ひ口を漱ぐ也。佛教は元來輸入品なれば、寺院の造りさまも、輸入的也。金碧焜燿たるもの多し。神社は白木造りにて、清淨を愛する日本男兒の氣質に合せり。支那の華表は、日本の鳥居とは別也。鳥居は日本獨得のものにて、世界に類なしと聞く。鳥居にも、清淨の美あるべし。寒垢離も、潔癖より出でたり。著物に白色を尚ぶも、清淨なれば也。何物も、古きよりは、新しきが清淨也。疊の新しきを喜び、犢鼻褌の新しきを喜ぶも、清淨を愛するより出

でたる也。山内容堂は、毎日縮緬の犢鼻褌を新に用ゐられたりと聞く。初物食へば、七十五日命が延ぶると云ふも、清きを愛する也。江戸兒が初鰹を珍重するも、新しきもの、卽ち清ければ也。再婚の妻を嫌ふも、新しからざれば也。

例を擧ぐれば、果てもなし。日本男兒が物質に清潔を愛すること、世界に比なし。これ日本男兒の特色中の特色也。それが精神上にも、牢として動かず。清きを愛する日本男兒の心は清き也。明淨を愛する日本男兒の心は明淨也。清新を愛する日本男兒の心は、清新也。日本男兒の心は、汚からざる也、濁らざる也、曇らざる也、曲らざる也。到る處の神前に鏡を見る。鏡は神の心なると共に、日本男兒の心也。皇祖之を神器の一とし給へるも、以ある哉。嗚呼日本男兒の心は鏡の如し。明ならずや、清ならずや、潔ならずや、淨ならずや、新ならずや、正ならずや。

清き日本男兒の在る處、衣清し、食清し、家清し、村清し、町清し、國も清し。天にありては太陽、人にありては日本男兒。月や星や雨天には全く暗黑也。太陽の照す處、雨ふればとて、萬象明か也。大和魂の語や古し。その解釋も十人十色なれど、直に其本體を捉ふれば、日本男兒の心中に山櫻ありて、朝日と相映發する也。清き心、君に發して忠也。親に發して孝也。國に發して愛國也。强暴者に發して義憤也。弱者に發して義俠也。事に發して方正也。物に發して清廉也。職に發して忠實也。人類に發して博愛也。安に發して和暢也。危に發して勇敢也。技に發して精妙也。死に發して未練なき也。

心の混濁せるものは、恥を知らず。心の明淨なる日本男兒は、恥を知る。卽ち廉恥心に富めり。廉恥心あるものは、義に進退して、私利私慾に盲動せず。百萬金前にあるも、義にあらざれば、

取らず。一錢後にあるも、義あれば、之を捨てず。賄賂などの行はるべき筈なし。歐米の巡査は、金次第にて盜賊をも逸す。我國の巡査とは、雲泥の差あり。我國の巡査の淸廉、世界に無比なるは、吾人の大に誇とする所也。巡査のみならず、苟くも眞の日本男兒たるものは、みな淸廉也。利慾に迷はざる也。金の爲めに節を賣らざる也。心の明淨なる日本男兒は、正義を解す。正直也。曲りたる事を嫌ふ。利害損得生死をも顧みざる也。天野康景一卒をして竹木を守らしむ。鄰村の民來り盜む。卒之を斬る。鄰村は天領也。天領の民を殺すは、德川家に對して不敬なりとて、本多正純、康景に命じて下手の卒を刑に處せしむ。康景爭へども許されず。正義に於て卒を殺すべからず。されど臣として主家に不敬あるべからず。如かず、臣籍を脫せむにはとて、一萬石の興國寺城を棄つること敝履の如く、飄然去つて草澤の間に老いたり。眞

の日本男兒と云ふべき哉。心の明淨なる日本男兒は、公平也。私曲なし。權威に屈せざる也。靑砥藤綱引付衆となりけるが、德宗と田を爭ふ者あり。德宗とは北條氏の家督也。同僚みな北條氏を憚りて、田を德宗に歸さむとす。獨り藤綱公平に詮議して、本主に歸す。本主大に喜び、錢三百貫を藤綱の邸內に投じて去れり。藤綱怒つて曰く、われ豈に汝の爲めに法を枉げむや。わが裁判正しからば、相模殿こそ賞賜せらるれ。われは汝の貨に汚さるゝ者に非ずとて、錢を返さしめたり。眞の日本男兒なる哉。官吏公吏みな藤綱の心があらばと思はるゝ也。心の明淨なる日本男兒は、其進退動作禮節に合す。日本語に敬語の多きことは、世界無比也。これ日本男兒が禮節を解するより出づ。禮節は阿諛にあらず、又卑屈にもあらず。心に神を敬すれば、神前に自から頭がさがるべき筈也。長上者に對すれば、長上者に對する禮節あり。後輩に對

すれば、後輩に對する禮節あり。今の世、禮節の念薄らぎかけて、傲慢不遜を以て快男兒の事と誤解せるものすらあり。成上り者、山出し者の傍若無人的態度は、斷じて眞の日本男兒にはあらざる也。禮節を解せる日本男兒は、人に惡感情を起さしむるを避く。痛くとも痛き顏をせず、悲しくとも悲しき顏をせず、苦しくとも苦しき顏をせず、卽ち妄りに喜怒哀樂をあらはさず。これ歐米人には見るべからざること也。日本人とても、眞の日本男兒ならでは見るべからざること也。其域に達せざる者は、僞善的なりと云ひ、衒へりと云ふ。歐米人は往々之を目して、不正直なりといふ。淺い哉。人間修養して、禮節の本意を解すれば、必ずこゝに到るべき筈のもの也。心の明淨なる日本男兒は、名譽を尙ぶ。その名譽心も、己れの虛榮心より出でたるに非ず。己れを辱めじ、己れの父祖を辱めじ、己れの團體を辱めじ、己れの國家を辱めじ、己

れの理想を辱めじと思ひて、よろづ清きを愛するより出づる也。源平時代の軍記を讀みたるものは、何々天皇の後胤、何々の末孫云々と、戰場に名乘りて、戰鬪を挑みし例の多きことを知れるなるべし。これ我家系を自慢するに非ず。心中には、決して祖先を辱しめずとの用意あり。敵に對しては、御相手になるべき資格あるものなりとて敬意を拂へる也。日本人にしてこの心掛あらば、如何なる外國に行きても、決して排日問題は起らざるべき筈也。孔子曰はずや、居處恭に、事を執る敬に、人と忠ならば、夷狄に之くと雖も棄つべからざるなりと。排斥せらるゝは、我に言はすれば彼が無理也。彼に言はすれば、我にも無理な點ある也。眞の日本男兒にあらざる也。心の明淨なる日本男兒は、樂天的也。何事をも悲觀せず、過去を追及せず、未來の取越苦勞をせず。精神の全力を現在に集中し、樂んで奮鬪す。艱難を恐れず、萬死且つ

辭せざる也。義の爲め、國の爲めに死するは、朝飯前の事也。人生の光明を見て、人生の暗面に氣を留めず。人を愛して、人を怨まず。一身を離れて、博愛衆に及ぼし、くよ〳〵思ふことなく、こせ〳〵することなく、己を正しくして、恐るゝ所は唯天のみ。人を恐れず、敵を恐れず、死を恐れず、貧を恐れず、正を尙んで邪を憎み、善を喜びて惡を排し、到る處、朝陽の櫻花に映發する光景を呈せしめずんば止まざらむとす。大和魂の本體、豈に世界に光被せざるべけむや。

八　日本男兒を代表する文豪

今の文壇、何ぞ混血兒の多きや。洋の皮相を學んで、其骨髓を得ず。云はゞ半洋半和、未成品の安物也。過渡時代の文藝として怨すべき點もあれど、日本男兒の作品と銘打つべくもあらず。今

の文壇、又何ぞ變生男子の多きや。いづれを見ても、弱く、小さく、低く、どこをどう叩いても、雄大剛健の音は出でず。日本男兒と名乘らるべくもあらざる也。されど、過去に溯れば、日本男兒を代表する文豪なしとせむや。第一指の屈する所、果して誰ぞや。日本男兒は、何人も先づ賴山陽を擧ぐるに異議なかるべし。

花より明くる三吉野の　春の曙見せたらば
唐土人も高麗人も　大和心になりぬべし

これ山陽の作る所、作意の奥を叩かば、日本男兒躍出せずや。山陽曰く、『尺を曲げて尋を直くするは、卽ち爲さゞる所』と。山陽の短所も、こゝにあるべけれど、山陽の山陽たる所以は、實にこゝに在り。山陽は潔癖也。明淨也。大和魂の本體を具備せる也。或時、田能村竹田の入京を機とし、山陽を始めとして知人相會し、七福神に擬して知人七名の像を描かしめむとせしことあり。其七

人の中に、貫名海屋もまじれり。海屋は當時日本一の書家也。當時日本一なりしのみならず、今日までも、海屋ほどの書家は未だ出でざる也。然るに山陽曰く、『海屋來り加はるならば、われ請ふ去らむ』と。其故を問へば、答へて曰く、『われ先日海屋を訪ひしに、適ま海屋は八百屋を呼び入れて、まけよ、まからぬの談判中なりしが、少し腐つて居るを以て、安くせよとて直切れり。粗糲を食ふとも、恥にはあらざれど、腐りたる物を食ふといふことは學者の恥也。余は斯る人と席を同じうするを恥づ』と。明淨なる山陽の性情、この逸話の中に躍動せずや。當年の學者文人は、支那を學ぶことに腐心せり。その半漢半和の醜陋なるは、なほ今日の文士の半洋半和の醜陋なるが如し。山陽や獨り然らず。山陽は漢學に通じ、漢詩漢文を作りたれども、其精神氣魄は、飽くまでも日本男兒的なり。詩文書畫の四者を竝せ能くせしは、支那にて蘇東坡

が第一也。日本にては賴山陽が第一也。若し其大を言はゞ、山陽は東坡の下にあるべし。されど、山陽は日本男兒的として燦爛たる光輝を放つ。必ずしも大小を問ふべきにあらざる也。史記を著せる司馬遷は、支那第一の史家と稱せらる。山陽の日本外史を以て之に比するに、其大は及ばざるべし。されど日本外史は日本男兒的なる所に山陽獨得の長技あり。何ぞ必ずしも大小を問ふべけむや。若し唯文字の巧拙を問はゞ、當時山陽に優れる文士詩人少なからざりき。山陽は漢詩漢文を作りたれども、半漢半和の醜態を演ぜず、漢詩漢文を驅使して、日本男兒の精神氣魄を寓したる也。漢學我國に入りてより二千年、山陽に至りて始めて日本男兒的となれり。試に日本樂府一篇を執りて見よ。冒頭第一に、『日出處』と題して、

日出處。日沒處。兩頭天子皆天署。扶桑雞號朝已盈。

長安洛陽天未曙。嬴顛劉蹶趁二日沒一。東海一輪依レ舊出。

と歌へるに非ずや。我日本は東に在るが故に、日出處也。支那は西に在るが故に日沒處也。而して日出と云へば、目出度く聞え、日沒と云へば、果敢なく聞ゆ。推古天皇の時、始めて支那に使を遣はし、『日出處の天子、書を日沒處の天子に致す。恙なきや云々』の書を送り給へり。これ蕞爾たる小島國ながら、我に數十倍せる支那の大國を恐れず、對等の意氣込を以て之に接し給へる也。當時支那は、唐の一つ前なる隋の世にて、天子は煬帝なりゝ。その都は長安に在り。我京畿を西に距ること凡そ三十度、我扶桑國にては、雞號いて、既に朝となれるに、支那の長安や洛陽はまだ夜中也。支那は古來革命の國也。秦（卽ち嬴氏）が起るかと思へば、忽ち亡び、漢（卽ち劉氏）が興るかと思へば、又忽ち亡ぶ。支那の天子の革命毎に亡びゆくは、なほ夕暮毎に日の沒するが如く、

つい先き頃も、清朝は例の如く、日沒を趁うて亡べり。我日出の處は、萬世一系の天皇を奉ず。皇統緜々として天つ日嗣を嗣ぎ給へること、なほ朝毎に日出でゝ絶えざるが如し。世界無比の國體に非ずや。當年鎖國時代、人は太平の懶眠を貪れるに、山陽が日本樂府の劈頭第一、日出處を歌へるは、尊王愛國の精神を發揮して、國民的自覺を吐露せる也。『東海一輪依レ舊出』の一句、爽絶快絶、世にも明淨の美を極むるものに非ずや。而して山陽は日本樂府の結末に、『裂二封冊一』と題して、

史官到讀日本王。相公怒裂明冊書。欲レ王則王吾自了。朱家小兒敢爵レ余。吾國有レ王誰覬覦。叱咤再蹀八道血。鴨綠之流鞭可レ絶。地上阿鈞不二相見一。地下空唾恭獻面。

と歌へり。鬱勃たる日本男兒の元氣、外に發して八幡船となり、

胡蝶軍となり、終に大に發して、秀吉の朝鮮征伐となりしは、我國史上の一大快事也。唯惜むらくは、秀吉自から征する能はず、統帥其人を得ず。石田、小西の徒、明人に欺かれて、早く戰意を失ひ、一時を彌縫して和議を結ぶ。明韓の使者來る。秀吉之を伏見に延見し、僧承兌をして冊書を讀ましむ。『爾を封じて日本國王となす』の語に至り、秀吉烈火の如く怒り、冕服を脱して地に抛ち、冊書を取りて寸裂し、罵つて曰く『王たらむと欲せば、卽ち王たり。我が勝手になること也。朱家の小兒が生意氣にも我に爵を授けむなどとは、以ての外の事也。我國は開闢以來、君臣の分定まれり。臣民たる者、いかでか神器を覬覦すべき』と。再び三軍を叱咤して雞林八道を蹂躙したるが、眞の敵と目ざすは、朝鮮に非ずして明に在り。明韓の界なる鴨綠江を横斷して支那四百州を席卷せむばかりの勢なりしも、天、年を假さず、中途に死して、

其雄志遂げざりき。されば生前にては、明の王朱翊鈞と相見るに及ばざりしかど、なほ足利義滿の如き國體を辱めたる者を慙死せしむるに足る。義滿は明の冊書を受けたり。明之に恭獻王と謚す。何等の國辱ぞや。斯る奴輩の面には、唾吐きかけてやるべしとは、秀吉の意氣込なると共に、日本男兒の意氣込也。山陽が首に、『日出處』を詠じ、尾に『裂ニ封冊一』を詠じ、首尾呼應して、忠君愛國の精神、紙表に活躍せるに非ずや。三度までも秀吉の事を詠じて、全く德川家康を默殺せるも痛快也。而して日本樂府に收めたる篇數は六十六あるが、これ日本の六十六國に象れる也。日本六十六國とは、天長年間に定むる所にして、明治の世に及べり。

源頼朝は六十六國總追捕使なりき。六十六國の名は、今の人の耳にも熟せるなるべし。六十六國とは、畿內が山城、大和、河內、和泉、攝津の五國、南海道が伊豫、土佐、阿波、讃岐、淡路、紀

伊の六國、山陽道が播磨、美作、備前、備中、備後、安藝、周防、長門の八國、山陰道が丹波、丹後、但馬、因幡、伯耆、出雲、石見、隱岐の八國、北陸道が若狹、越前、加賀、能登、越中、越後、佐渡の七國、東海道が伊賀、伊勢、志摩、尾張、三河、遠江、駿河、甲斐、伊豆、相模、武藏、安房、上總、下總、常陸の十五國、東山道が近江、美濃、飛驒、信濃、上野、下野、陸奥、出羽の八國、西海道が豐前、豐後、肥前、肥後、筑前、筑後、薩摩、大隅、日向の九國これ也。壹岐、對馬は、今でこそ西海道に屬する國なれ。もとは、國と云はずして島と云へり。さらば、正しくは六十六國二島と云はざるべからざりし也。二島が二國となりしのみならず、明治元年には、陸奥が岩代、磐城、陸前、陸中、陸奥の五國となり、出羽が羽前、羽後となり、明治二年には、もと蝦夷と稱せし地が、北海道となりて、渡島、後志、石狩、天鹽、北見、

膽振、日高、十勝、釧路、根室、千島の十一國に分れ、明治五年には、琉球が西海道に屬せり。明治二十七八年戰役の結果として臺灣我が版圖に入れり。明治三十七八年戰役の結果として、樺太の一半我版圖に入れり。明治四十三年には、朝鮮全く我版圖に入れり。之を內に見れば、幕府倒れて、王政古に復せり。山陽の志、死後に伸びたりと謂ふべし。吾人は今日の昭代に處して、山陽時代を顧み、山陽の精神氣魄の迸る所を察して、益〻山陽を偉とせざるを得ざる也。

元來、樂府は支那に於ける舊詩體なるが、山陽の日本樂府に至りては、骨を換へ、胎を奪ひて、全く別樣の觀あり。山陽は單に樂府と稱せずして、日本樂府と稱せり。山陽の前に、日本樂府なく、山陽の後に、日本樂府なし。その名の如く、山陽の樂府は、日本男兒の樂府也。支那の樂府にはあらざる也。日本男兒にして

古來書を著したるものは、多けれども、山陽の日本外史ほど多く讀まれたるものは、他に其比を見ず。その多く讀まるゝは、日本男兒的なれば也。日本男兒の面目は、山陽の人物と映發して、日本外史に躍如たり。日本外史を讀みて、快哉を叫ばざるものは、斷じてこれ日本男兒にあらざる也。すべて書物を讀むには、冒頭と結尾とに注意せざるべからず。謝疊山の文章軌範は、初に韓退之が進仕を求むる文三篇を載せ、結尾に陶淵明が隱退を記せる『歸去來辭』を採れり。以て當年支那の學生の志尙を推すべし。山陽は日本樂府の初に、『日出處』を收め、結尾に『裂ニ封冊』を收めて、國體の尊嚴と日本男兒の意氣地とを歌ひ、忠君と愛國との精神を寓したり。日本外史にても、山陽の用意最も到れるものあり。冒頭の論文に曰く、

吾れ外史を作り、首に源平二氏を敍し、未だ嘗て王家の其權

を失へるを歎ぜずんばあらず。而して國勢の推移、人力の能く維持する所にあらざる者あり。世變に因りて得失を見る。後の世を憂ふる者、將に以て心を留むるあらむとす。

結末の德川氏の紀事に曰く、

源氏足利氏以來、軍職に在りて太政の官を兼ぬるは、ひとり公（家齊）のみ。蓋し武門の天下を平治する、是に至りて其盛を極むといふ。

首に朝廷の權力を失へるを歎き、尾に武門の全盛を說き、後の世を憂ふるもの留心せよと斷言す。これ尊王討幕の一大檄文に非ずや。而かも山陽は德川氏全盛の時に方りて、この檄文を草せり。豈に雄偉なる日本男兒に非ずや。

山陽は、畫を能くしたり。されど畫師と呼ばるゝを恥ぢたり。古賀穀堂曾て其藩侯の爲めに、山陽に絹地を送りて畫を求む。山陽は畫をかゝずに、詩二首を書して、之を送り返せり。其詩に曰く、

磊塊横レ胸不二自持一。吐爲二狂墨一漫淋漓。此心應レ有二故人識一。敢向二侯門一喚二畫師一。
曾謝二横レ經弄レ翰儒一。寧將二餘技一待二歡娛一。懷中畫本猶堪レ獻。彷彿豳風七月圖。

山陽は啻に畫を售る者に非ざるのみならず、書を售るものにもあらず。されど、死後、その書の價生じ、一幅五六千圓の貴きに達す。もし書の巧拙を言はゝ、當時海屋が第一也。篠崎小竹も山陽以上なるべし。されど巧拙以外、山陽の書には、山陽獨得の長技あり。氣あり、骨もあり、而して日本男兒的也。これ支那ならば、いざ知らず、日本にて山陽の書の價貴き所以也。山陽はまた文を賣りたることあり。されど、文を賣つて金を得るが、山陽

の目的にはあらざる也。山陽自から肖像に自贊して曰へるあり。

躬、一室に偃仰して、心は百代の得失に關す。己れの鹽虀を恤へずして、人の家國を憂ふ。

山陽の山陽たる所以は、實に此に在り。吾人が山陽を日本男兒の代表者として仰ぐ所以も、實に此に在り。嗚呼、今の世、何ぞ文士なくして、文商多きや。何ぞ政治家無くして、政商多きや。

余は今の學者、文人、政治家を看來つて、當年名利の外に卓立したる山陽を欽慕するの念、益〻切ならざるを得ざる也。諸君請ふ山陽が日本政記に於ける南北朝正閏論の後篇を讀め。

或人賴襄に謂ひて曰く、子の正統を論ずるは似たるなり。抑も子も亦北朝の臣子に非ずや。何ぞ諱まざる。曰く、何居ぞや。子の所謂北朝は安にか在る。曰く、今の朝廷是なり。襄曰く、於戲、今の朝廷は、神武以還の大一統の朝廷也。何

を以て北と曰はむ。北と曰ふは、延元、元中の間、天子南遷して、賊臣私に君を立つ。是時に當りて、南は卽ち正、北は卽ち僞、南に事ふる者は榮なり、北に事ふる者は辱なり。故に其稱を別たざるを得ざるなり。已にして天其禍を悔い、祖宗其衷を誘ひ、和議を講じて南北混一を成す。夫れ後龜山の瑣尾流離を以て、其神器を授くるや、肯て降式に從はず、必ず父子の禮を用ゐたり。足利義滿の兇威にして奪ふ能はざるなり。是に於て後小松始めて器を傳へ禪を受け、後龜山を尊びて、太上天皇と爲す。事懿にして、禮善なり。以て此より前の分派の陋を盪滌し、上は列聖の統を承けて、後世に顯示するに足れり。蓋し天と祖宗と實に之を佑く。足利氏の能く爲す所に非ざるなり。

これ其前半なるが、結末の一節に曰く、

此義明かならざれば、則ち萬世の後、天地再變せば、復た姦雄足利氏の如き者、其私便する所を擁立するあらむ。則ち今の自から北朝の臣子と稱する者、將に胥率ゐて之に從はむとす。是れ亦一北朝を生ずるなり。吾れ懼る。以て辯せざるべからず。

諸君記せよ、これ山陽が將に死なむとするに際して作りたるものにて、山陽の絶筆也。或人とあるは、猪飼敬所の事也。山陽は肺病に罹りて、垂死の蓐中に在りながら、なほ日本政記を手删して已まず。敬所見舞に來る。談、正閏論に及ぶ。山陽は病の身に在るを忘れて、南朝の正統なるを論ず。敬所曰く、『今の天皇は北朝の裔に非ずや。臣下にして南朝を正統とするは、如何なるものにや』と。議合はずして去れり。當時、『書は貫名經學猪飼詩山陽粹は文吉富は小竹』といふ狂歌もある程にて、猪飼は經學の大家也。

然るに猶此の如き俗解を有す。山陽豈に憤慨せざるを得むや。山陽の門人、猪飼去りたる後の事を記して曰く、『敬所翁既に去る。山陽先生曰く、苟くも北朝を以て正統と爲さば、豈に新田楠諸公を以て亂臣賊子となすかと。之を言ふの時に方り、目張り、眉軒る。其慷慨激烈、病むと雖も、衰へざるなり。終に更に正統論を著して、政記中、初論の後に置く』と。嗚呼山陽は死に臨みても なほ一身の事は思はずに、君國の事を思ひ、血を咯きながら筆を呵して、大義名分を明かにせり。古來劍を把つて壯烈なる死方をしたるもの多けれども、疊の上の病死に於て、山陽ほどに壯烈を極めたる者なし。維新の際、君國の爲めに起ちたるものは、幾んどみな山陽の感化を受けたる者也。德川氏が足利氏とならず、輪王寺の法親王が北朝とならざりしも、山陽の筆、與つて力なしとせむや。然るに世には猪飼敬所の流亞絶えずして、一二年前正閏

論再び起りしも、山陽の精神、識者の間に磅礴せるものありて、俗論忽ち屏息せり。われ古來の詩人文士を見るに、忠君愛國の詩人として山陽に比肩すべきものなし。花は櫻、詩人は山陽、これ日本國の粹に非ずや。

九　日本男兒を代表せる武士

われ既に日本男兒を代表せる文士を說きぬ。なほ進んで日本男兒を代表せる武士を說かずんば、文に偏するに似たり。されど、日本男兒を代表せる文士こそ珍らしけれ。日本男兒を代表せる武士に至りては、晴夜の星も啻ならざる也。乃木大將廣瀨中佐橘中佐を始めとし、日淸日露兩役に奮鬪せる上下の勇士、いづれか日本男兒を代表せる武士ならざる。維新の志士、いづれか日本男兒を代表せる武士ならざる。楠公や、四十七士や、北條時宗や、鎭

西八郎や、數へ立つれば、果てもなし。其中にて、余は特に伊東祐親の一門を擧げむと欲するもの也。

富士の裾野の五月雨、篝火消えてあやめも分かぬ眞夜中に、二個の白刃、電光ときらめきて、工藤祐經の首飛びし一大活劇は、數百年の今日までも、なほ人の耳目に新た也。曾我物語一部、文は妙なりとせざれども、內容が日本男兒的なるを以て、今に日本男兒に讀まる。曾我兄弟を主人公とせる院本は、數十百の多きに至り、忠臣藏と共に芝居に演ぜられ、前の曾我物語、後の四十七士、これ仇討の兩大關なると共に、日本國民一般に喜ばるゝ演劇の兩大關也。曾我兄弟が仇討するに至るまでの徑路を說かば、日本男兒を代表するに足るべき武士の面目、自から躍如たるべき也。

伊豆の天城山は、今なほ天下有數の御獵地也。數百年の昔、猛獸野禽の多かりしこと推して知るべし。この天城山は、偉大なる

山にて、伊豆半島を南北に分てるが、其餘脈は更に伊豆を東西に分つ。伊豆の東部は、山勢急にして直に海に逼り、太平洋の怒濤押寄せて岸を嚙む。他との交通絶えて、人情自から粗朴也。猛獸鯨鯢を相手として、氣性自から剛健ならざるを得ず。武士の養成には屈强の地也。河津、伊東、宇佐美、の三莊、南北數里に亙りて、自から一小王國をなす。伊東祐親は實にこの土地を領して、この土地を代表せる武士中の武士也。伊豆の西に至りては、狩野川の流域平坦にして、駿河に接し、海に臨むも、其海は波浪穩かなる駿河灣也。伊豆國中、農商先づ開けしなるべし。他との交通も便にて、商業も開けしなるべし。伊豆國中、政治家の出づべき地は、こゝを措きて、他に求むべからず。北條時政は、實にこの土地を領して、この土地を代表せる政治家中の政治家也。東の伊東、西の北條、これ當年伊豆に於ける二雄也。伊東の勇と北條の智とを

合はすれば、天下何人か能く之に敵せむや。源頼朝が伊豆の蛭が小島に流されしは、恰もこの二雄が伊豆の東西に對立したりし際也。

蛭が小島、もとは狩野川に圍まれたる土地なれども、今は島になり居らず。人或は曰く、平氏は、蛭が小島を海上の孤島と思ひあやまりて、頼朝を流したるならむと。これ皮相の見也。平氏豈に蛭が小島の何たるを知らざらむや。唯伊東北條の二雄が心を合せて監視すれば、それが絶海の孤島なる也。頼朝の流されし時、人皆曰く、これ虎を野に放つが如しと。平氏若し頼朝を箱根以東に流さば、虎を野に放つもの也。伊豆に置きて、伊東北條二雄に監視さすれば、それが安全なる鐵柵なる也。平氏が監守者として伊東祐親を擇びたるは、目の利きたるもの也。北條時政を擇びたるは、目が利きたりとは云ふべからざるも、時政のみに頼まずし

て、寧祐親を主としたりしは、必ずしも失策とは云ふべからざる也。祐親は武士中の武士也。殊に平家譜代の臣也。義心鐵よりも堅き、たのもしき男也。北條氏は平家の一門也。されど直方が其女を源頼義に妻したる縁故もあり。時政一人の監守にては、安心が出來ず。祐親之に加はらば、頼朝を伊豆に放つとも、平氏は枕を高うして臥するを得べき也。

安元二年十月十日、伊東祐親は、伊豆、相模、駿河、武藏の豪傑を招集して、天城山に狩を催せり。これ今日御獵局主催の狩獵と大演習とを兼ねたるもの也。獲物の多かりしこと、今日の比にはあらざるべし。三日三夜、盛宴を張り、餘興には、若殿原の角力始まれり。俣野景久、剛の者也。二十一人を投げ倒して、意氣揚々たり。祐親の長男祐泰、躍り出でて、二度までも景久を投げて、この日の月桂冠は、實に祐泰の手に落ちたり。その剛勇知るべき也。然るにその歸途、祐泰は、不意に急所を射られて落命せり。祐親も射られたるが、創淺うして、命には別條なかりき。射たる者は何人ぞ。又何故に射たるぞ。

祐親の父を祐家といひ、祖父を家繼といふ。家繼は河津、伊東、宇佐美の三莊を有したるが、妻の連子に通じて、祐繼を生めり。祐家早世して、祐親なほ幼也。家繼死するに臨み、遺言して曰く、我所領は悉く祐親に讓るべし。されど、年なほ幼なれば、祐繼中嗣となるべし。而して祐親を嫡子として、成人せば、之に所領を讓れと。祐繼は、其言を守りて、中嗣の任を果して、所領を祐親に讓れり。祐繼に一子あり。工藤祐經これ也。祐繼死するに臨み、祐親に謂つて曰く、心にかゝるは祐經の行末也。御邊の娘御の聟ともなして、三莊の中、一莊ぐらゐ讓られずやと。祐親之を諾せり。祐經元服して後、京に上り、平家に事ふ。祐經は伊東の

地氣にも似ざる優男也。和歌管絃に長じ、優美なる平家の公達の間に伍して、毫も遜色なかりき。然るに、いつも困るは、女の猿智慧也。祐親は武士の一諸、次女を祐經に嫁して三莊中の一莊を譲る考なりしも、祐經の母は、それとは知らず、祐經に使をやりて、三莊みな祐經の有なるに、祐親が奪へるなりといふ。祐經は青年の血氣に任せ、前後の思慮もなく、使を祐親にやりて、所領を悉く返還せよと迫る。正直なる武士氣質の祐親、豈に怒らざるを得むや。祐繼殿との約束を實行せむと思ひ居れるに、斯る催促に及ぶは、言語道斷なりとて、使を追返す。祐經恨んで、平氏に訴ふ。祐親益〻怒り、祐經が斯くまで我に敵意を挾む上は、最早聟に非ず、舅に非ずとて、祐經の妻と定めおきたる次女を土肥遠平に嫁せしむ。祐親は京に召出されて祐經と對決に及びしが、祐親の言ふ所、理あり。宇佐美一莊を祐經に譲り、餘の二莊は祐親

の所領たるべしとの判決下れり。これ祐親の始めより覺悟せし所、少しも不服は無し。唯祐經は宇佐美一莊にては滿足せず、深く祐親を恨みしこそ淺ましけれ。

祐經は慾に目がくれて、竊に京を出で、駿河に下り、母方の一族高橋重長を語らひ、二百騎ばかり率ゐて、伊東に押寄せむとす。事洩れたり。祐親大に驚き、長男祐泰、次男祐清を兩大將として兵を集む。部下の兵數百あり。急を聞きて、土肥實平、同遠平、三浦義澄、和田義盛、曾我祐信等兵を率ゐて來り會し、總勢一千餘騎となりぬ。衆寡敵せず、祐經悄々として京に引返せり。京にも落著かれず、また伊豆に忍び來り、乳兄弟の大見成家、八幡行氏二人に、祐親を殺さむことを頼みて、京に引返せり。祐泰を殺し、祐親を傷けたるは、卽ちこの二人也。

祐泰が射られてより死するまでには、時間ありき。暗殺者の大

見八幡二人なることは見屆けたり、而して之を語れり。祐泰の弟祐清、五十騎を率ゐて八幡行氏を攻めて之を殺し、同時に伊東の家臣網代小中太、松原八郎の二人、三十餘騎を率ゐて大見成家を攻めて之を殺し、直接の仇は討ちたり。張本人の祐經は、京にあれば、之を如何ともすること能はざりき。祐泰に三子あり。長男は十郎、次男は五郎、三男は伊東禪師、これ也。母は十郎、五郎を連れて、曾我祐信に嫁せり。伊東禪師は祐清之を養ひけるが、祐清の死後、武藏八王子の常光坊實湛に養はれて、實永と稱し、後、越後に移れり。

頼朝伊豆に流されてより二十年、これ平家の全盛時代也。頼朝の父祖が如何ばかり恩威を關東に施したりとも、頼朝如何に英雄の資を有せりとも、伊豆の住人伊東祐親が頼朝を預り居る間は、天下太平也。祐親は平家譜代の忠義者也。頼朝に向つては、冷酷

ならざるを得ず。祐親に三女あり。長女は三浦義澄に嫁せり。祐經に嫁すべき筈の次女は、土肥遠平に嫁せり。第三女なほ家に在り。頼朝之に通じて男子を生めり。祐親、京の大番より歸り來り、之を知りて且つ驚き、且つ怒れり。我娘を平家の仇敵に嫁せしめては、平家に對して、實に相濟まざる也。祐親豈に涙なからむや。されど大義、親を滅す。頼朝の子は、之を殺したり。第三女は、頼朝との仲を割きて、江間小二郎に嫁せしむ。江間小二郎とは、西に對峙せる北條時政の次男、後に鎌倉第二の執權となりたる北條義時の事也。祐親は更に進んで、頼朝を殺さむとす。平家武運長久の計、之に越したることなし。されど、頼朝を殺すだけの名義なし。次男の祐清之を不可とし、父を諫む。祐親、頑として聽かず。殺すが非なるか、殺さゞるが是なるか。祐親の主張にも道理あり、祐清の主張にも道理あり。祐清以爲へらく、謀いかで

か洩れざらむや。如かず、我先づ洩さむにはと。往いて父の隱謀を告げ、伊東の地を去らしむ。げに物のあはれを知れる武夫なる哉。賴朝走りて北條氏に依る。嗚呼大事去れり。

祐親は犬也。時政は狸也。犬が平家の怨敵を監守する間は大丈夫也。狸が代りて監守するに至りては、危險千萬也。賴朝また時政の長女政子に通ず。これ江間小二郎の同母姉也。時政、京の大番より歸り來りて之を知りたるが、狸の事なれば、祐親の驚きたる如くには驚かず。却つて奇貨措くべしとて、竊に喜べり。但し時政には重大なる責任あり。卽ち新に目代となれる平兼隆と同道して來り、且つ政子を之に妻はさむことをさへ約束せる也。狸の事なれば、その約束を破るは、何の事もなけれども、表面には怒らざるべからず。その表面の怒を避けむとて、賴朝は政子と共に、伊豆山權現の僧坊に潛めり。それにて、事は解決せり。時

政が平兼隆への分疏も立ちたり。かゝる程に、以仁王の令旨下りて、賴朝兵を擧げ、あはれや、平兼隆は眞先に槍玉に擧げられ、軍門の血祭に供せられたり。賴朝が石橋山に戰ふ際は、政子はまた伊豆山權現の僧坊に潛めり。今日にてこそ一縣社に過ぎざれ。鎌倉時代には、三千八百房を有して、關東の總鎭守なりしも、亦宜なる哉。賴朝は石橋山に一敗したるも、箱根權現の僧の助によりて、再擧するを得たり。箱根權現が伊豆山權現に次いで源氏に重ぜられ、伊豆山權現と共に二所と稱せられしも、亦宜なる哉。三島明神第三位に列して、合せて三所と稱せられけるが、明治の世となりてより、三島は堂々たる官幣大社也。箱根や伊豆山は微微たる縣社に過ぎず。變るは神社の上のみならず、賴朝を舁ぎし北條氏は榮え、賴朝を殺さむとせし伊東祐親は忽ち釜中の魚となり、平氏に投ぜむとして、途中にて捕へられたり。祐清は父の囚

へられたるを聞きて、歸り來りて、自から縛に就けり。父と共に死せむとするなり。然るに、祐親の女婿三浦義澄等の功に免じて、祐親は赦されたり。舊領に安堵するを得たり。然れども祐親は日本男兒を代表するに足るべき武士也。平家の忠臣也。豈に恥を忘れて生を貪るものならむや。赦さるゝと同時に、見事自害したり。祐清は賴朝の命の親也。朝賴之を殺すべき筈なし。祐清は我恩を以て父の命を乞はむとせし也。然るに父は男らしく自害したり。祐清豈に恥を忘れて生を貪るものならむや。賴朝命じて祐清を赦す。祐清曰く、我は平家の臣也。我を赦さば、公を平家の敵として刃を向くべし。それにてもなほ我を赦さるゝかと。我を敵としても可なりとて、祐清を赦しけるが、祐清は去つて平氏に就き、平家の爲めに戰ひて、潔く討死せり。天晴れの武士と云ふべき哉。

伊東の一門は、斯くむざ〳〵と亡びたれども、天豈に忠臣義士

の子孫に殘酷ならむや。祐清の遺兒祐光、召出されて、再び伊東を領し、祐親の遺蘖、再び舊地に茂れり。朝高の代に至りて、日蓮こゝに流されて、朝高之を監守せり。前の賴朝、後の日蓮、いづれも伊東の地氣と相應ぜずんばあらず。伊東氏の子孫は、緜々相連なり、明治の世にいたりては、華族に列せり。

祐經の領にする、せぬとて騷がれし宇佐美の地は、伊東の北に隣れる半漁半農の一村也。中村敬宇先生の父母はこの地の產也。江戸に出でて、武士の株を買ひしは、伊東の地氣を辱しめざるものと云ふべし。その子の敬宇先生は學德雙絕、明治初年の聖人と稱せられたり。文武其途を異にしたれど、豈に伊東の地氣に負けりと云はむや。

平家榮ゆれば平家に就き、源氏榮ゆれば源氏に就くもの少なからざるが中に、工藤祐經、伊東氏の血は受けたれど、その武士の

魂は傳へず、平氏の門に仕込まれし才藝、今や賴朝の爲めに調法がられて、鎌倉に全盛を極む。變れば變る人の身の上哉。憐れむべし、伊東の嫡流、曾我十郎は、母と共に曾我祐信に養はるれど、曾我の領を嗣ぎ得べくもあらず。祖父は平家無二の忠臣なる代りに源氏の仇敵、鎌倉に召されむ望もなし。弟の五郎は箱根の僧坊に養はる。そのまた弟は僧となれり。されど十郎は祐親の血を傳へたる武士也。豈一身の境遇を悲觀するものならむや。我父は工藤祐經の爲めに殺されたり。祐經は不倶戴天の父の仇也。我身の任務は、唯祐經を殺すに在り。されど、祐經は賴朝の寵臣、出入常に數十百騎を從ふ。あゝ如何にすべき。その大磯に流連せしは、大石良雄が祇園に流連せしと、前後其揆を一にするものなしとせむや。幾度か祐經をねらひたれど、其機を得ず。終に賴朝が富士の裾野に卷狩を催すに際し、弟の五郎と共に、首尾よく祐經を討取たり。その孝心と云ひ、其勇氣と云ひ、武士の精神を發揮して、伊東氏の子孫たるに恥ぢず。否、日本男兒を代表すべき武士として、祖父祐親、從父祐淸と共に、日本の歷史に花を咲かせり。仇を復して後、十郎は先づ斃る。五郎は賴朝の幕を犯さむとして捕へらる。賴朝問うて曰く、何故に我幕を犯すやと。五郎傲然として答へて曰く、我祖祐親は、將軍之を仇とし、我仇祐經は將軍之を寵す。故にわれ將軍を怨むと。その語氣と云ひ、面魂と云ひ、世にも勇ましきに、賴朝之を壯として、其命を赦さむとせしが、祐經の遺孤の哀訴に因りて、止むを得ず、之を殺せり。伊東禪師、二兄の變を聞き、自から名乘り出でて、勇ましく死に就けり。曾我兄弟、いづれも揃ひも揃ひし剛の者也。日本男兒を代表せる武士として、古今に闊步す。大正二年初冬、われ伊東溫泉に浴し、祐親の墓に謁し、其邸跡に逍遙して、いとゞ感慨に堪へ

ず。黄に紅に四山空しく錦を纏ふ。久しく續きし晴天、忽ち變じて時雨の空となり、細雨蕭條として、天も亦古武士の遺跡を弔ふかとばかり思はるゝ也。

神州論

『とこしへに民安かれと祈るなる我世を守れ伊勢の大神』

明治天皇のこの御製を拜誦しまつるにつけても、日本國民たる者、誰か感泣せざるものあらむや。西洋人の神、卽ちゴッドの國は死後に在り。印度人の神、卽ち彌陀の國は、十萬億土の西に在り。我等日本人の神の國は、わが日本也。我日本は神の國也。伊勢の大神を始めとし、日本國中、津々浦々、如何なる山の奥までも、人の住む所は、神社あらざるなし。否、人の住まざる富士や、筑波や、大山や、日光や、白山や、立山などの名山の頂には、必ず

神社あり。高天原に千木高知れる神明造りは、如何にも莊嚴ならずや。鳥居は支那の華表とも異りて、世界萬國、唯日本にあるのみ也。我日本を神州と稱し來りたるは、尊大でもなく、誇張でもなく、自惚れでもなし。實際、日本は神の國也。

伊勢の大神は、天照大神也。卽ち神州の皇祖也。八幡宮は、應神天皇也。天滿宮は、菅原道眞也。富士山の神は、木花咲耶姫也。出雲の大社は、大己貴命也。春日神社は、藤原氏の祖なる天兒屋命也。立山の神は、天の岩戸を開きたる手力雄命也。湊川神社は、楠正成也。松陰神社は吉田松陰也。靖國神社は、王事に死したる者也。これだけ擧ぐれば、我國の神の何たるかは分かるべし。我國の神は、皇祖皇宗也。國土を經營したる偉人也。至誠君に盡したる人也。國の爲めに死したる人也。功德廣く民に及ぼしたる人也。所謂、技、神に入るの人也。日本國民は、斯る人を神

として仰ぎ、之を敬して自から謹み、自から勵み、自から律し、人をも律し、而して人と相和し、相合して、こゝに現世に於て、神の國を出現したる也。

試に國史を讀め。人皇の前に、神代あり。神代史は、眞の歴史にもあらず。又西洋の所謂神話にも非ず。日本國民性の粹、凝りて、一種の神話的國史となりける也。『高天原に八百萬の神たち、神集ひに集ひ、神謀りに謀る』とあるは、何ぞそれ自我的、利己的、個人的の臭味なく、國家的、社會的、團體的にして、闊大の氣性に富めるや。當時、神集ひに集ひ、神謀りに謀りし人は、いづれも我國の神々也。神々の上、更に神あり。卽ち我皇祖也。皇祖は、天孫を我國に降らしめ給ふに方り、三種の神器を授け、且つ告げて曰く、『豐葦原瑞穗國は、吾が子孫の王たるべき土地なり。皇孫行きて之を治めよ。寶祚の隆えまさむこと、天壤と共に窮りなかるべし』と。これ卽ち我神州の開闢也。

人皇の始祖、神武天皇、帝位に橿原の宮に卽き給ひ、靈時を鳥見山に立て、皇祖天照大神を祭り給ふ。神を祭るは、卽ち民を治むる所以也。皇祖に盡す心を以て、民に盡し給ふ。明治天皇の御製の心は、卽ち神武天皇の心也。明治天皇と神武天皇のみならず、列聖相受けて、この心、萬古に垂る。政は卽ち祭事也。祭政一致は、我神州の國體也。神の子孫は、矢張神也。卽ち現つ神也。一年中の大祭日はみな神を祭る也。唯一つ天長節のみは、現つ神を祝する也。

神州人は、神を通じて宇宙を觀じ、人生を悟る。神を敬する者君に不忠ならむや。親に不孝ならむや。人に不義不正ならむや。事に不眞面目ならむや。コムミッション大臣たらむや。墮落せむや。破廉恥とならむや。卑屈とならむや。よろづ神に向つて上進

す。精神いよ〳〵清く、いよ〳〵正しく、いよ〳〵高く、いよ〳〵大也。印度文明の入り來るや、寺院の壯、佛像の美、人目を眩惑せり。神州人は、その文明に盲目なるほどに、頑冥、無智、無神經ならざれども、一朝忽ち祖先傳來の敬神の念を失ふが如き輕薄なる國民に非ず。佛を本地とし、神を垂迹とし、神佛混淆するに及びて、佛敎始めて我國に同化せり。神佛混淆は、弘法大師に大成して、明治の初までも續けり。この一千年間、佛敎は上下一般に行はれたり。されど、その爲めに敬神の念の失せしこと無し。戰國の末に至り、耶蘇敎、鐵砲と共に入り來り、織田信長の如きも、其信者となりて、京都に南蠻寺を立て、信者の多きこと、今日などの比に非ず。數百萬にも及びけるが、當時の耶蘇敎は、信仰を假りの看板として、其實、侵略に供するものにて、神州に取りて、危險千萬なることを看破したりければ、神州茲に國を鎖し

て、耶蘇敎を嚴禁したり。繪踏として、耶蘇の像を踏ませ、踏みたる者は之を許し、踏まざる者は、耶蘇敎信者なりとて、之を殺せり。斯く耶蘇敎を嚴禁すると共に、國民をして悉く皆佛敎に入らしめたり。されど神州人が敬神の念は失せたるには非ず。否、江戸三百年間、佛にも增して威靈赫々たるものありき。卽ち權現也。權現とは神佛混淆の世の神の事也。而して大師が弘法の專有なる如く、太閤が秀吉の專有なる如く、權現は家康、卽ち東照權現の專有となれり。今日江戸の遺民、なほ權現樣を說くもの少なからず。江戸三百年は、將軍が支配せりと云ふよりも、寧ろ權現が支配せりと云ふべき也。維新に至りて、權現の國は、神の國に復古せり。鳥羽伏見の砲火收まりてより間もなく、紫宸殿上、天神地祇を祭り、親王、公卿、諸侯、百官群臣を會し、五條の御誓文を發し給ひて、明治天皇の聖世、こゝに明けたり。權現を月とすれ

ば、伊勢の大神は太陽也。太陽出でて、月その光を失ふ。日光の東照宮、今は一の美術となりて殘り、神州の民、舊に依りて、萬古伊勢の大神を仰ぐ。『何事のおはしますかは知らねども、辱けなさに涙こぼるゝ』と感ずるもの、獨り西行法師のみならむや。

神に氏神あり、產土神あり。氏神とは、藤原氏の春日神社に於ける、德川氏の東照宮に於けるが如きものにて、氏族には、それぞれ氏神あり。產土神とは、日光の二荒山神社に於ける、東京の山の手の日枝神社に於ける、下町の神田神社に於けるが如きものにて、町村には、それ〴〵產土神あり。血統を同じうする者は氏神にて相合し、鄕土を同じうする者は、產土神にて相合す。この意味に於て、神州人はみな伊勢の大神に相合す。伊勢の大神は、神州人の大氏神にして、又大產土神也。況んや其子孫の正系、卽ち萬世一系の現つ神を奉戴するに於てをや。これ神州の特質也。

田中智學翁、曾て說いて曰く、日本全國、遠近を問はず、修學旅行の中、一度は必ず伊勢の大神に參拜せざるべからずと。大に同感に堪へざる所也。

人を敬ずるものにして、始めて人に敬せらるべし。神を敬するものにして、始めて神として敬せらるべし。尾崎行雄氏は、國葬を以てその理想とせりとの事なるが、國葬にては未だし。死して神として祀らるゝが、人間最上の域也。これ求めて得べきに非ず。至誠、神に通ずる人にして、始めて其人卽ち神也。二宮尊德の歌に曰く、『古道につもる木の葉をかきわけて天照神の足跡を見む』と。この至誠あり。故に能く農政に神通力を發揮し、報德敎を開き、功德ひろく天下後世に垂れたり。人よくこの域に達すれば、自ら神となるに意なくとも、世人之を神とせざるを得ず。小田原の舊城址にある二宮神社は、實に尊德を祀れる也。二宮は、尊德

の氏名なるが、その二宮の氏名は、住する地名より出でたり。その二宮の地名は、土地に祀らるゝ神名より出でたり。諸國に一宮、二宮、三宮等の地名あり。一宮は其國一番の神社のある處、二宮は二番の神社のある處、三宮は三番の神社のある處也。今、二宮の神名が地名となり、更に氏名となり、更に又神名となるは、神州獨特にして、世にも面白き現象に非ずや。而して尊德の如き至誠神に通ずる人にして、能く自からこゝに至る也。乃木大將の明治天皇に殉するや、黑岩涙香歌つて曰く、『今日まではすぐれし人と思ひしに人と生れし神にぞありける』と。これ神州人の一般に共鳴する所也。かくて乃木神社出來たり。人麿は和歌の神也。芭蕉は俳諧の神也。本居宣長は國學の神也。福澤諭吉は三田の神なるべく、大隈伯は早稲田の神なるべし。神州人は上に正系の大神として、伊勢の大神を戴くと共に、至誠神に通じ、精神功德の天下後世に光被するあらば、其人自からも神となる也。

神のある處、卽ち神社也。されど神社以外にも神あり。大師堂は神社に非れど、弘法は一種の神也。祖師堂も神社に非れども、日蓮も一種の神也。宗吾靈堂も神社に非れども、佐倉宗五郎（木內宗吾）は一種の神也。四十七士の墓も、神社に非れども、四十七士は一種の神也。龍華寺に於ける高山樗牛の墓は、駿河の一名所となり、その母校なる第二高等學校にては、每年必ず樗牛會を開く。樗牛も亦神となりける也。

日本男兒と正坐

一

日清戰爭に勝ちて、日本國民の腰高くなれり。日露戰爭に勝ちて、其腰ます〳〵高くなれり。危い哉。角力は日本獨特の競技に

非ずや。試に角力を見よ。角力の勝負の分るゝ所は、全く腰の強弱如何に在り。又一歩進んで考へて見よ。腰を高くすれば、腰弱く、腰を低くすれば、腰強し。これ豈に獨り角力のみならむや。勝たば、兜の緒を締むべきに、腰を高うしては、これ日本の國技とも云はるゝ角力を度外視せるもの也。切言すれば、自から日本帝國の前途を呪ふもの也。

日本國民が腰を高うすると反對に、歐米の識者は腰を低うして日本を研究し始めたり。彼等は日本國民が個人的國民に非ずして、家族的若しくは國家的國民なるを知れり。忠君の國民なるを知れり。愛國の國民なるを知れり。大和魂といふことに氣付きたり。開闢以來萬世一系の天皇を奉ぜる日本獨特の國體といふことにも氣付きたるやう也。されど、彼等は未だ日本國民の腰の強きことには氣が付かざる也。

われ聞く。柔道の山下師、西洋に柔道を傳ふること多年、熱心に眞面目に敎授しけるが、西洋人は今一歩と云ふ處まで進みて、それより上へは進まず。體は強し、力は強し、勇氣もあり。何故に今一歩の處に進み得ざるかと怪みしが、終に其理由を解し得たり。卽ち腰が到底日本人の腰に爲れざるに基づくことを知れりとかや。

われ又之を一軍人に聞く。曰く、日本兵を以て露國兵に比すれば、身長と云ひ、體量と云ひ、腕力と云ひ、到底日を同じうして語るべきに非ず。されど日本兵は露國兵と同じ重さの兵器彈藥等を身に付けて、毫も苦しめる樣なし。これ日本兵の腰の強きに由るなりと。

『腰が強い』、『腰が弱い』、『腰を拔かす』、『腰拔け』等の語は、今も猶日本國民の間に唱へらるゝに非ずや。角力の祕訣は腰の強

きにあることは、日本男兒の大多數の夙に了解せる所なるべし。柔道も劍道も亦腰の强きを要す。而して肉體上の競技のみならず、精神上の事業にも腰が强からざるべからず。腰の弱きものは、所謂腰拔けのみ。讀者諸君、請ふ、如何なれば日本國民は腰が强きかを考一考せよ。

歐米人は皆平生腰を掛くるに非ずや。支那人も朝鮮人も亦腰を掛くるに非ずや。世界の半開以上の國民にして、疊の上に正坐するものは、唯日本國民のみ也。他の六かしき理由も、絲瓜もなし。日本國民は正坐するが故に、腰が强き也。而かも一代や二代の事に非ず。日本國民は、開闢以來、正坐し來れる也。然るに明治維新以來、西洋物質的文明の美に眩惑し、俄に腰掛くるやうになりて、疊の上に正坐する能はざるもの十中七八は是れ也。斯くて代を逐ふまでもなく、既に現代に於て、腰の力、非常に減退せり。

これ余が皇國の危機を叫ぶ所以也。

二

論より證據、近年、二木式腹式呼吸とか、岡田式靜坐法とか云ふものが、世にもてはやされ居るに非ずや。これ日本國民が日本固有の正坐を忘れて、西洋の皮相を眞似したる天罰也。願くは一日も早く反省して、日本國民は日本國民の祖先の爲したる通りに正坐せよ。疊の上に在る時は、言ふまでもなし。外勤して椅子に腰かくる場合にも、止むを得ざるもの丶外は、椅子の上に正坐せよ。正坐して居りさへすれば、自然に臍下丹田に力が出來る也。又自然に腰が强くなる也。又自然に精神が確になる也。余は正坐と云ふ。靜坐とは云はず。聞く、岡田式靜坐法に加はる者は、膝にて座を叩きて躍り動くもの多しと。斯る靜坐は危險千萬也。正

坐は、文字通りに正しく坐る也。足を重ねて、其上に腰を落付くるだけの事也。腰より下が痛まうが、しびれやうが、命には別條なし。それを我慢するが、卽ち正坐の精神也。否、日本國民の日本國民たる所以也。なほ換言すれば、正坐は腰より下を抑壓すること也。腰より下を抑壓するが故に、腰より上が樂になる也。卽ち五臟六腑の活動が自由になる也。頭が靜穩になりて、智慮自から生ずる也。魂が丹田に落付きて、大變に遭ひても妄りに腰を拔かざゝる也。腰より下を抑壓すること、初の程は苦しと思ふものあるべけれど、少し慣るれば、何等の苦痛もなきやうになる也。その苦痛の無くなる迄正坐を實行する能はざるものは、所謂意氣地なし也。弱蟲也。腰拔け也。そのやうな了簡にては、社會の水平線上に飛躍する能はざるものと、自から諦むるの外なし。されど、そんじよ、そこらの國民なら、いざ知らず、日本國民には、それほどまでの意氣地なしは有らざるべし。さらば暫し二時間でも五時間でも十時間でも、腰より下の小苦楚を忍べ。足が無くても達磨は達磨也。大隈伯は隻脚なきに非ずや。況して腰より下が少し位痛むとも、それで直に足が無くなるものにもあらねば、身體に別條あるものにもあらざる也。

三

胡坐と書きて、『あぐら』と訓む。胡は『えびす』也。『あぐらかく』は、『えびす』の坐り方也。皇國固有の坐り方に非ず。平安朝の公家は胡坐に似たる坐り方を爲したるやう也。宜なる哉、公家の腰の弱かりしことや。然るにこの頃は男子一般、疊の上にては『あぐら』かくもの、比々みな然り。斯くては、日本男兒も當年の公家の如く腰が弱くなるべし。危い哉、〳〵。中には洋服著た

るものは、あぐらかくが當然なりと心得たるものすらあり。何たる心得違ひぞや。さもしき心の人は或は云はむ、洋服著て正坐すれば洋袴の膝に當る處がふくらみて、見苦しくなると。これでは堂々たる日本男兒が、區々たる洋服の奴隷になりたる也。何んと情けなき次第に非ずや。而かも軍人ともあるべき人が之を口癖にするに至つては、嗚呼日本帝國も末路に近づかむとする哉。

胡坐は腰より下を苦しめざれど、正坐の如く久しきに堪ふる能はず。殊に腰より上を苦む。正坐して腰下を苦しめて五臟六腑を樂にするが得策なる乎。胡坐して腰下を樂にして五臟六腑を苦しむるが得策なる乎。賢明なる日本男兒、請ふ一考せよ。更に一考せよ。いざといふ場合に、胡坐の方が起ち易き乎、正坐の方が起ち易き乎。力ある大聲を出すには、胡坐が可なる乎、正坐が可なる乎。謠曲や、詩吟や、義太夫や、浪花節や、三味線や、日本の

音樂はみな正坐より生ず。琴を彈ずるには、正坐しては窮屈也。ちと考へ物也。

人或は曰はむ、正坐すれば、脚短くなりて競走に不利なりと。これは其通り也。日本人は競走には到底西洋人に敵する能はざるべし。されど妄りに慾張るべからず。腰の力を失ひて西洋人と競走の出來るが是なる乎。西洋人との競走には一歩を讓りて、腰の力に勝つが是なる乎。車夫や郵便配達とても、まさか判斷に迷はざるべし。

人或は曰はむ、數千年來正坐し來れる日本人は、腰より下が短くして、體裁が見苦しと。然り、洋服著たる場合に、見善きものに非ず。されど脚を一二寸伸ばさば、支那人となるまでの事也。西洋人に比して、五十歩百歩のみ。それよりも體裁は見苦しくとも、腰に力あり、丹田に魂ある方が得策にあらざる乎。賢明なる

日本國民は、斷じて外形の虛飾に迷ふべからざる也。

四

熟ら現代の日本國民を見るに、物質的文明上、西洋に追及するに急にして、知らず〳〵精神的文明上、固有の美を失ひつゝあり。且つ一般に自墮落になり、浮調子になれり。正坐の一事、事小に似て、決して小に非ず。日本男兒が腰下の小苦痛に堪へて正坐することを能はざるやうになりては、いかでか皇國の興廢の爲に惡戰苦鬪に堪ふるを得むや。正坐は正しき心の表象也。横膝は、ごまかし也。胡坐は横著也。横膝と胡坐とに慣れたる者が、椅子に腰をかくとも、竟にこれ浮腰のみ。ごまかしや、横著や、浮腰で、正しき事業が出來るものに非ず。大なる事業が出來るものに非ず。之を小さく云へば、名奔利走、一身の安樂を求めて、而かも之を得ずに悶死する也。之を大きく云へば、先進文明國の糟粕、否、餘毒を嘗めて、知らず〳〵亡國の域に近づきつゝある也。病、膏肓に入らば、扁鵲もまた如何ともする無し。今や皇國の危機也。然れども今にして國民一般に反省すれば、危機を轉ずること、必ずしも難からず。語を寄す、日本男兒、道は近きに在り。先づ正坐より始めよ。

日本男兒と六尺褌

一

海水に身體を鍛へむとて、家を擧り、親戚をさへ誘ひて、房州北條に寓居しけるが、一日午後、ふと思ひたちて、一同二艘のボートに乘りて、鷹島に遊ぶ。男七人、女七人也。巖間の溜り水に小魚の浮游しけるを見て、一擧之を捕へ盡さばやとて、水をかへ

ほしけるに、圖らずも、一つの章魚を見出して、之を捕ふ。一同喜ぶこと甚し。晩に近づきて、風起り、波や〻高し。たま〳〵石油發動の遊覽船寄航し來たりければ、女はみな之に乘りて先づ歸ること〻し、男はみな二艘のボートに分乘して、歸路に就く。十二歳の義甥、十四歳の甥、頭が二十歳、末が六歳なる豚兒四人、余を合せて七人也。驅逐艦六艘ばかり相連りて碇泊し居りけるが、余を除きては、いづれも、まだ軍艦を參觀したることなし。われふと衆に向ひて、今日唯今、之より往いて參觀せずやと云へば、一同喜んで之に應ず。驅逐艦はいづれも皆同じ型にして、同じ大さなれば、選擇の面倒もなく、最寄の一艦を目がけて漕ぎ付く。

參觀の許を得て、舷門に至りしに、不意に思ひ立ちし事とて、ボートを舷門に縛りつくべきものなし。軍艦より綱を乞はゞ、乞はるべけれど、乞食の口吻を學んで餘計なる手數を掛くるは、余

の屑しとせざる所也。何か綱に代るべきものもがなと考ふるより早く、腰に結びたる六尺褌を思ひ起し、之を解いて、ボートを軍艦に結び付けたり。艦上の將士、見て微笑せる樣子也。ついでに、余等一行の服裝を記さむに、余以外の六人は、みな所謂海水著なるものを著たり。帶を締めたるものは一人もなし。余は裸體のまゝにて、木綿袴を穿き、體の上部には、ゴムのマントを纏へり。いづれも皆軍艦を參觀せむとする者の風體に非ず。われ艦長に陳謝して曰く、實は今日は初より參觀を志したるに非ず。鷹島に遊びて歸る路すがら、俄に思ひ立ちて、參上せし次第也。願くは一同の風體の禮を失するを許させ給へと。艦長笑つて頷く。われまた先に鷹島にて捕へたる章魚を、攪網に入れたるまゝにて艦長の前に捧げ、漁夫より買ひたるものに非ず。我等が鷹島にて手づから捕へたるもの也。笑納あらせらるれば幸甚なりと云へば、

艦長笑ひながら、一卒を麾いて持ち去らしめ、我れに席を與へ、煙草と煙草の火とを供す。われまた艦長に向ひ、幸に拜觀の光榮を得たり。一行はみな甥若しくは豚兒にて意氣地の無き者共なり。在來軍艦を拜觀せしことなし。軍事上の勇ましき高諭を垂れて、之を鞭韃し給はらば、光榮の上の光榮なりと云へば、承知せりと頷く。船暈の事に就いて、いろ〳〵質問を試みしに、船暈に耀ると否とは、結局各人の天賦の如何なりと答へながら、語を轉じて、君は大町桂月氏にあらずや。寫眞にて見覺ありといふ。軍艦の將校に未見の知己あらむとは思ひがけざりき。他の一將校曰く、君の房州に來り居らるゝことは、新聞にて承知し居れりとて、其新聞の名まで擧げて、微笑せる樣也。その時は、われ如何なることが其新聞に出で居りしかを知らざりしが、後その新聞を見しに、眞僞とりつくろひて、唯讀者の好奇心を惹かむとするものなりき。

將校が微笑の意味も、それと分りて、このやうなる僞事を書かれては困るとは思ひたるが、在來多く斯る目に遭ひたる事とて、また例の新聞記者の慣用手段かとのみにて、氣にも留めざるまで、我が神經はにぶりたり。

二

艦長、一將校をして余等一同を案内せしむ。肩章を見しに、艦長は大尉、その案内の將校も大尉なりき。その案内の將校、甲板上より下士官室を指して曰く、百十度の溫度ありと。陸上にあるものが、九十度内外の熱度に堪へかねて、暑いの、苦しいのなど言はれた義理に非ずと思ひぬ。更に機關室を指して、百三十度に達すといふ。われまず〳〵驚きぬ。司令塔の説明を聞くに及びて猶一層驚きぬ。驅逐艦は軍艦中の極めて小なるもの也。小なれば

小なるほど、浪を被ること甚しく、驅逐艦は幾んど浪の中を航行す。司令塔に在る者は、身を縛りつけ、顏の當る處だけ硝子を張りて、ズックにて塔の四面を蔽ふも、浪なほ塔内に入るのみならず、洋服を透して身體に浸み込み、犢鼻褌までも濕ふに至るとかや。冬日の苦、實に想ふべき也。一寒一熱、いづれにしても、非常也。元來驅逐艦は、敵艦に近づいて水雷を發射するもの也。速力極めて早し。從つて艦體の割りに、機關が非常に大也。從つて石炭を多く積まざるべからず。殊に艦體の割りに、水雷發射管が非常に大也。驅逐艦の大部分は、水雷發射管と機關とに占められて、幾んど人の居るべき餘地なき構造也。而して常に浪を被らざるべからず。戰ふに方りては、最も危險を冒して敵艦に近かざるべからず。平時に在りても、寒苦此の如く、熱苦此の如し。げにや、百聞は一見に若かず。意氣地なき豚兒輩も、一度實地に就きて驅逐艦の說明を聞きたるだけにて、大に感奮する所ありたるべしと、世にも嬉しく思はるゝ也。

三

讀者諸君、余は驅逐艦を見たる時の感想のあらましを記したるが、余は玆に驅逐艦を說明せむとする者に非ず。驅逐艦を說明するは、世、其人あり。余の如き門外漢の企て及ぶべくもあらざる也。唯余が六尺褌を以て、我がボートを軍艦に結び付けたるを、如何にか感じ給ひたる。一場の滑稽と感じ給ひたるか。何か意味のある事と感じ給ひたるか。問はまほしきは諸君の六尺褌に對する感想也。余の一友人、六尺褌の一益を說いて曰く、われ嘗て舟を漕いで海に出でしに、櫓綱切れて大に困れり。舟中に綱なく、繩なく、帶も締め居らざりしが、幸にも六尺褌を締め

居りたれば、之を櫓綱に代用して、船を進むることを得たり。これが西洋褌ならば、余は海中にて進退維れ谷りしならむと。借問す、六尺褌の效用は、櫓綱に代用したり、ボートを繫ぎたりするとのみに止まるか。又借問す、諸君は六尺褌を締め居らるゝか。越中褌を締め居らるゝか。抑も西洋褌を締め居らるゝか。

余は日本男兒の特色として、先づ正坐を擧げたり。誤解し給ふこと勿れ。正坐は平生の心掛け也。正坐して、自然に腰の力を強くせよ。又自然に力が丹田に入るやうにせよ。脂肪質の人は、自から下腹がふくれて、一寸丹田に力ある如く見ゆ。されど、脂肪腹の人は、臍が下向く。丹田腹の人にして、始めて臍が上向く。臍の上向くまで修養するが眼目也。如何なる時にも、如何なる場合にも、必ず正坐せざるべからずと固執せば、正坐魔に墮すべし。聞く、坂本龍馬は、主客が絕えず正坐して向ひ合ひ居りては打解け難しとて、互に横になりて語り合ふことを常としたりとかや。

又聞く、後藤象二郎長崎にて一外人と會談しけるに、その外人は傲慢なる人にて、無禮にも雙脚を卓上に擧ぐ。象二郎癪にさはりて、同じく雙脚を卓上に擧ぐ。外人恥ぢて、無禮を謝したりとかや。打解けて放談し、若しくは飲酒する場合には、胡坐かく方がその場に相應しきことあるべく、綠草の上に横臥して、一層の趣味、加はることもあるべし。徒歩の旅行に疲れたる時は、何人も脚を伸ばして寐たがるものなれども、脚を折りて寐れば、能く疲勞を醫して、翌日足が輕くなるべしとは、旅行の經驗深き先賢の說ける所也。これも正坐に關聯して心得おくべきこと也。眞に力が丹田に入らば、脚の脈は止まるもの也。脚の脈止まらずんば、まだ力が眞に丹田に入り居らざる也。正坐に志す者、試に手を脚以下の脈ある處に當てゝ、之を檢して見られよ。正坐に次ぎて

日本男兒の特色なりと思はるゝは、六尺褌也。

四

余は房州に滯在するの間、日々濱邊にて多くの赤條々の男兒を見たり。而して漁夫はみな六尺褌を締め居れるに、浴客の大部分は西洋褌を締め居れり。西洋褌は上等にして、六尺褌は下等なりと思へるか。日光浴の點より云ふも、游泳中若しくは游泳後の便宜の點より云ふも、費用上より云ふも、種々の利用上より云ふも、西洋褌の六尺褌に勝れる點は、一つも無し。老人は稀に越中褌を締むるものあり。越中褌と當て事は前より外るゝと言はるゝが、西洋褌もまた前より外るべし。紐小さくして、強く腹を締むる能はざるは、越中褌も西洋褌も、全く同一也。六尺褌は然らず。六尺褌をぎゆつと締むれば、腹に力

を生ずべく、腰脚が矯捷になるべく、氣が引立つべく、下つては肉慾の盲動を制壓すべし。『犢鼻褌を締めて掛る』の語、今もなほ日本人の間に行はれ居るに非ずや。犢鼻褌を締めて掛れば、勇氣自ら生じて、妄りに驚くことなく、心落付きて根氣長く續き、活動敏になりて、邪念起らず。船に乘りても船暈を防ぐ一助となり、車にゆすぶられても、身體を害ふことなく、路を行くにも、山を登るにも、身體輕くなりて、疲勞を減じ、身體上は言ふも更なり、精神上にも、生氣を添へ、活動を助く。重ねていふ、『犢鼻褌を締めて掛る』とは、千萬無量の眞理を發揮したる哉。而して、この犢鼻褌とは、日本特有の六尺褌也。日本人のみ此犢鼻褌の恩典に浴す。日本人以外の國民は與らず。日本人とても、越中褌や西洋褌を締むる者は與らざる也。

古武士

一

建久元年源頼朝入朝せしことあり。其途中、東海道の菊川に宿しけるに、佐々木三郎盛綱來り謁し、鮭の楚割といふものを獻上せり。其口上に曰く、『これは非常に旨きものにて候。早く食上つて下されずや』と。頼朝喜んで食ひしに、果して旨かりき。乃ち一首の歌を咏じて盛綱に贈る。

逢ひ得たる人の情も楚割の
わりなく見ゆるこゝろざし哉

この時佐々木の口上は、鎌倉武士の氣風をあらはせり。鎌倉武士の氣風は、やがて日本國民本來の氣風也。天眞爛漫也。僞ることなく、飾ることなし。旨きものは旨しと云ひ、まづきものは不味しといふ。自分の不味しと思へる物は、決して人に贈らず。これならば贈つて然るべしと思はるゝものを擇びて贈る。從つて口上も有りのまゝに云ふ也。有りのまゝに云ひて、眞情躍動す。後世に至りては、之に反し、たとひ珍らしく旨きものを贈るにしても、『これは甚だ粗末なるものなるが、聊か寸志を表す』と謙辭を用ゐるやうになり、義理一片になり、人情の美、蕩然として空しくなれり。折角の志が、一向難有からざる也。

二

和田合戰の時、和田方には、朝比奈義秀など云ふ豪傑ありて、幕府方大に苦戰せしが、終に和田方を打破れり。軍功を論ずるに方り、三浦義村と波多野忠綱との間に、先登の爭起れり。この戰爭に就いては、北條氏は三浦氏の恩を負ふこと大也。北條義時

密に忠綱を召して諭して曰く、『澤山に褒美を贈るべければ、先登爭を止めて吳れ』と。然るに忠綱容を改めて曰く、『御承知にも候ふべし。勇士の戰場に向ふは、先登するが本願にて候。拙者が武士の家業を受け繼いで弓馬に關つて居る以上は、幾度なりとも、先登せざるべからず。若しも先登せざるならば、武士の恥辱この上もなく、拙者の家名を汚すにより、如何ばかり多くの御褒美ありとも、これだけは御辭退申す』と。義時止むを得ず、二人を調べしに、先登者は果して忠綱なりき。褒美に目がくらまず、北條氏の權威をも憚らずに、武士の意氣地を通したるは、あつぱれの快男兒といふべし。今や、擧世滔々、唯金に動く。政治家の節操も金に破れ、文士の筆も金に曲がる。慨はしい哉。

三

坂東一の旗頭、熊谷次郎直實、花の如き美少年の敦盛を討つて無常を感じて坊主になれりと云へば、如何にも詩的なるが、武士は物のあはれを知る。直實も無常を感ぜしなるべけれど、その坊主となりしには、他に大なる原因あり。義理の叔父なる久下直光との間に領地の爭起れり。直光は賴朝の寵兒なる梶原景時に取り入りて、都合の好きやうに證據書類をつくりて、賴朝を抱き込んで仕舞へり。剛直一方の直實は、何等の策略もなし。二人賴朝の前に呼び出されたるが、賴朝は直實のみを詰問して止まず。直實大に怒り、『直光は景時と心を合せて、將軍の前を取繕へるにより、拙者を曲とせらるゝならむ。その儀ならば、領地も何もいり申さず』とて、證據書類を賴朝の前に投げ、飛び出して髮を剃り、家へも歸らずに、京師に走れり。賴朝惜んで追はしめたれど、及ばざりき。正直にして、勇氣ありて、腹が綺麗にして、少しも濁

ることの出來ざる快男兒と云ふべし。かゝる快男兒なれば、京都に往きて、法然上人の弟子となりけるが、二三年にして忽ち大悟徹底せり。鎌倉に來りて、賴朝の前に、佛法と兵法とをあはせ說きけるが、いづれも蘊奧に達し居れるに、賴朝を始め、鎌倉武士一同感歎して措かざりき。日本男子には、直實と同型に屬するもの少なからざるが、近頃にては、乃木大將が其最も偉大なるもの也。

四

源賴家、小坪の濱に遊びける時、朝比奈義秀、海中に潛つて鮫を三匹捕へ來る。賴家感歎して、乘用の馬を與ふ。その馬は奧州より來れる天下無雙の名馬にて、鎌倉武士は誰も欲しがらぬもの無し。義秀の兄、和田常盛もその一人にて、次ぱ〳〵賴家に乞ひたれども、許されざりき。今、我弟に賜はれるを見て、殘念に堪へず。賴家に向つて曰く、『水練にては或は弟に負くるかも知れざるが、相撲ならば、兄だけの事あり。一つ相撲取らせて、勝ちたるものに馬を賜はるやうに成し下されずや』と。賴家『面白し』とて之を許す。兄弟二人、裸になり相撲を取る。義秀は天下無雙の勇者也。常盛とても、剛の者也。龍驤虎闘、世にも壯觀を極めけるが、義秀は常に攻勢を取り、常盛は守勢を取り、久しくして勝負決せず。北條義時終に兩人を引分けたり。引分くるより早く、常盛は裸のまゝ、走り出して、彼の馬に飛び乘り、一鞭當てゝ、雲を霞と馳せ去れり。その迅速さと、義秀が地團太踏みて口惜がりし樣とは、げに一場の好喜劇、一同覺えずどつと笑ひ興せり。何事にも迅速きは、日本人の一特質なるが、常盛の如きは、その適例也。

盛綱の率直にして眞情の溢れたる、忠綱の權力に屈せずして武士の意氣地を貫きたる、直實の剛直にして淸廉なる、常盛の無邪氣にして機敏の妙を極めたる、いづれも當年の日本男兒の精粹を得たるもの也。而していつの世にも應用の出來る事也。之を丸藥にでもして、腐敗し、墮落し、意氣銷沈し、小利口になりて、骨なく、腸なく、日本男兒の面目を汚す今の世の紳士とやらに飲ませたきもの也。

勇ましき切腹

一

むかし葉公、畫龍を好んで常に賞玩しけるが、一日眞の龍現れ來りしに、賞玩どころか、吃驚仰天して逃げ出せりとかや。日本武士の花と云はれたる切腹は、今や唯舞臺の上に見るに過ぎず。

叔父なる人、數回切腹に立合ひけるが、『刀を深く入るれば、引きまはすこと能はず。淺く入るれば、唯しやあ〳〵云ひて、腹の皮が裂くるだけにて、血出でず。切腹も容易なるものにあらず』など物語りき。武市半平太が三文字の切腹法を行ひたるは、よくよく心の確かりしたる人ならでは出來ぬ業也。武士の中にも武士の魂なき者あるにつれて、切腹にも扇切腹といふものありき。大祿の道樂息子など切腹仰付けらるゝ場合に、藩に由りて、之を用ゐることありしとかや。いづれ武士の魂なきものなれば、刀は渡さず。その代りに扇とは、見下げられたるも亦甚しきもの也。切腹仰付けらるゝは、死刑中の最も上等なるものにて、士分以上に限れり。足輕以下にして、切腹仰付けらるゝは、一期の光榮なりき。切腹は、今日の自殺とは、大に其趣を異にす。日本人の切腹といふと、世界に知れ渡りて、折り〳〵海外の舞臺に上る。

言はゞ葉公の畫龍也。眞の切腹は、眞龍也。今日日本人を始め、歐米人も畫龍を見る氣にて、舞臺の上に切腹を見れども、明治元年の春、佛國人は切腹の眞龍を見て、恐怖して逃げ出したることありき。

二

『こんどこのたび泉州堺土佐の攘夷が大當り』といふ俗謠、なほ今の人の耳に殘り、土佐十一士の墓、堺なる妙國寺の側の寶珠院に累々として相竝び、香華常に絶えず。東京に上るものにして、四十七士の墓に詣でざるは無きが如し。堺に遊ぶものにして、十一士の墓に詣でざるは無し。烏羽伏見の砲火收まりてより間もなき時の事也。土藩の二小隊、朝命を奉じて、堺を警衛す。箕浦猪之吉、西村左平次、其隊長たり。杉紀平太は軍監、生駒靜次は小

監察として其上に立てり。二月十五日、佛國人禁を破りて、大阪より妄に通行し來るとの報に接し、箕浦、西村、各隊兵を率ゐ、杉生駒も加はりて、進んで大和橋に至りしに、果して佛人來る。幸に通譯を伴れ居りしかば、言語通じ、之を制して去らしめたり。

兩隊歸陣して休息せしに、午後四時頃、市民周章來報して曰く、『只今佛人突然上陸し、市中に横行亂暴す。直に救助あらむことを請ふ』と。箕浦、西村直に隊卒を率ゐて出張せしに、佛人は人家に押入り、社寺に亂入し、傲慢無禮、到らざるなし。隊卒を指揮して、之を制止すれども、通辯一人も伴はざるを以て、言語通せず。止むを得ず、捕縛せむとせしに、軍監より制止の令下りしかば、如何ともする能はず。とやかく訊問する中、佛人隙を窺ひて逸走す。その中の一人は、我軍旗をさへ奪ひ去れり。隊卒之を追ふ。漸くにして軍旗は取返したるが、佛人既に小舟に乘りて、

陸を離れむとし、短銃を放發する小面の憎さ。今はこれ迄也。この儘去らしめては、神州の恥辱なり土藩の恥辱なりとて、隊長命を下し、小舟に向つて射擊す。佛人は三人死し、七人負傷し、一人だけ無事にて、佛艦に收容せられ、六人海に落ちて、行方不明となれり。

佛公使怒つて、我政府に向ひ、五箇條を提出し、其中の三箇條を擇べと嚴談す。

第一　土佐の兵隊を指揮せし士官兩人、竝に手を下したる兵士殘らず、日本の官員竝に佛國海軍兵隊の眼前に於て、刑に處すべし。

第二　被害者の家族等扶助の爲めに、土佐侯より十五萬弗を差出すべし。

第三　親王の內、朝廷の外國事務第一等の執政たる人、佛船に來謝すべし。

第四　土佐藩主自ら佛船に來謝すべし。

第五　土佐人兵器を帶して開港場を通行し、又土佐人開港場に滯留することを嚴禁すべし。

我政府は土藩に交渉の上、第一條、第二條、第四條の三者を擇ぶことゝなれり。

さてまた刑に就く者に就き、箕浦、西村は、隊長のみ死して、隊卒を助けむことを乞ひしかど、朝議之を許さず。覺のある者は自ら名乘り出でよと令せしに、隊長始め名乘り出でたる者二十九人ありき。然るに朝議二十人を限りたれば、大監察小南五郎右衞門、神前にて御闕を引かしむ。隊長の箕浦西村、小頭の池上彌三吉、大石甚吉は引かず。卒の二十五人にて引けり。御闕に洩れたる者の中の中城淳五郎、横田靜治郎、榮田次右衞門、田丸勇次

郎の四人は、書を上りて、同じく死に就かむことを請ふ。朝廷の有司、其志を感賞したるも、人數既に定まれるを以て、之を許さゞりき。

死に就くものは、卒の十六人、隊長二人、小頭二人を合せて全二十人也。小頭以下は、いづれも身分賤しき足輕にて、平生藩内にては、苗字を名乘るを得ず、下駄を穿くを得ず、絹布を服するを得ざりしが、今回特別の詮議を以て、士分の格式に仰付けられ、下駄絹布をも許さる。刑は斬首ならで、光榮ある切腹也。屠所の羊のそれならで、勇んで出で立つ南海男兒の死出の旅、生れて始めて著たる絹布はれ〴〵しく、始めて穿きたる下駄の音高らかに踏み鳴らす間もなく、駕籠に載せられ、藝肥兩藩の士二百人に護衞せられて、堺の妙國寺に赴く。實に明治元年二月二十三日也。

箕浦猪之吉、西村左平次は士分也。小頭以下の足輕とは、別に

置かれ、特別の待遇を受け居りしが、こゝに十八人と相見て、『過般當地に於て、佛人討攘に及びしは、全く我等兩人の指揮せし所にして、諸君の關知せる所にあらざるは、言を待たず。罪は我等兩人に在り。諸君を悉く宥免あらむことを上申したるに、裁許を得ず。遂に諸君までも、切腹の上裁を受くるに至れるは、我等兩人の遺憾に堪へざる所にて、何とも諸君に對して申譯なし』と、繰返し〳〵詫びたるに、『いや〳〵決して然あるべからず。假令隊長の命に從ひし事なればとて、其行爲に至りては、我々此兩隊は將卒一體の運動に外ならず。如何ぞ罪を隊長のみに歸し、我々死を免るゝの理あらむや。我々豫め死は覺悟の事なれば、御心置き、全く御無用なり』と聲を揃へていふ。兩隊長、其忠義の切なるに感じ、頻りに謝辭を述ぶ。隊長も隊長なれば、隊卒も隊卒也。死生の間に綽々として餘裕あり。禮儀正しくして、態度堂々

たり。熊本藩士、感じ入り、『諸君が死に臨み從容たるは、實に武夫の龜鑑なれば、後日歸鄕の土產としたし。何なりとも一筆書きて給はれ』と請ふ。衆之を諾して、思ひ〳〵に書き殘しけるが、箕浦は一絕を作つて曰く、

除ニ却洋氛一答ニ國恩一。決然豈可レ省ニ人言一。唯敎三大義傳ニ千載一。一死元來不レ足レ論。

四

酒肴出でて、諸士快く飲食す。準備既に整ひて、將に切腹の壇に上らむとせしに、天の涙か、今まで晴れたる空、俄に搔き曇り、大雨沛然として盆を覆すが如く、場內の混雜言はむ方なく、正午に始むべき筈なりしが、延びて午後四時に至れり。箕浦第一番に呼び出さる。割腹の場には、晃親王を始め、東久世少將、伊

達少將、薩、長、藝、肥、及び土藩の警衞士、檢視の官吏等、順次に列を正して居並び、佛人は公使を始め、其外二十人許、小銃を携へ、椅子に著きて臨檢す。切腹は日本武士の花なるが、上は親王を始め、公家も加はり、大名も加はり、外國公使さへ加はりて臨檢せる妙國寺の切腹の如き、花々しき切腹は、實に空前にして絕後なり。

箕浦泰然として壇上に端坐し、先づ我檢視の諸官に敬禮し、眼光鋭く、遙かに佛人を睥睨し、一聲高く叫んで曰く、『咄、佛奴惡むべし。予が割腹を見よ』と。徐に短刀を拔き、腹十文字に搔き切り、臟腑を攫み出し、佛人に投げ付けむとす。介錯人、箕浦の首を擊つ。過つて上部に中り、深く入らず。再び擊つ。首未だ落ちず。箕浦大聲を發し、『まだ死なぬ』といふ。三たび擊ちて、首落ちたり。箕浦年二十五。その剛膽不敵の擧動には、衆みな舌を捲

いて驚歎す。佛人は悚然として面色を失し、正視するを得ざりき。次に西村、壇に上る。諸官に禮し、刀を拔き、左腹より右方に引き廻す。刀淺し。再び突き込み、引いて半に至る。介錯人一擊して、首前に飛ぶ。西村、年二十四。第三番に小頭の池上、壇に上り、腹を撫し、眞一文字に搔き切る。介錯人一刀に首を落す。第四番に小頭の大石、從容として席に著き、諸官に禮し、佛人を睨み、腹十文字に搔き切り、靜に短刀を座右に置き、遙に佛人を睨み、兩腕を張りて、『介錯人賴む』と呼ぶ。介錯人聲に應じて一刀を下す。淺くして切れず。再び切る。また切れず。再三再四するも、首なほ落ちず。七度目にて、始めて首落つ。この間、大石は少しも動かず、毅然として平常の如し。有司みな色を失し、佛人愈恐怖し、四肢悉く寒戰す。續いて、杉本廣五郎、勝賀瀨三六、山本哲助、森本茂吉、北代健助、稻田貫之丞、柳瀨常七の七人順次

切腹し、第十二番目の橋詰愛平、壇上に上りし時、寺內正に點燈す。橋詰從容として衣を披き、將に刀を下さむとせしに、佛人恐怖益甚だしく、一同椅子を離れ、手を振り、缺舌喃々、後をも見ずして逃げ去れり。

有司、一先づ橋詰の死を制止す。橋詰を始め、生き殘れる九人、切齒すれども、如何ともする能はず。有司、佛船に赴きて談判せしに、佛人は土佐人の勇ましくして死を捨つること土芥の如くなるに感じ、且つ恐れ、天朝に奏して殘る九人の助命を乞はれたしと願ひ出でたり。有司還りて九人を諭し、『穩便に朝廷の御沙汰を待つべし』と告ぐ。翌二十四日、『大阪表に立退くべし』との朝命下れり。橋詰は、『死ぬべき命、夷人の命乞ひの爲めに助かること如何にも殘念なり』とて、自ら舌を嚙み切り、睾丸を絞めて絶息しけるが、人々の介抱にて蘇生せり。後、九人は切腹を免ぜられ、

國許へ送り還され、幡多郡へ流されけるが、この年の末、明治天皇御卽位式擧行あらせらるゝと共に、赦免せられたりき。

あゝ世にも花々しく又勇ましき切腹に非ずや。首を回らせば、既に四十七年、當時この切腹に立合ひし人にして、なほ生存するものあれども、文明の波滔々として、餘毒を含みて寄せ來り、士氣全く地に墮つ。むかしは廉恥を重んじ、切腹して謝罪したりき。今は銅臭上下に滿ち、公盜朝野に跋扈す。人は唯私情に殉して大義あるを知らず。一身の虛榮に急にして、國家あるを知らず。眼中唯黃金ありて、士道なく、廉恥なく、禮義なく、死生の外に武士の魂を貫きし日本男兒の美風失せて、文弱となり、卑劣となり、驕慢となり、自墮落となり、破廉恥となり、面の皮のみ厚くなり、物質文明の美に眩惑して、精神文明は退歩し、人は禽獸の域に墮ちむとする也。

日章旗

新月はやがて滿月となることあるべし。されど、滿月はやがて缺月となり、下弦の月となり、殘月となり、終に全く闇黑となるべし。新月を國旗とせる土耳古は、嘗て滿月の時代もありき。今や光なき殘月の光景を呈せるこそあはれなれ。我日本は太陽を國旗とす。簡單明瞭にして、その含む意味は深遠且つ雄大なる哉。米國は星を國旗とし、其星の數は州の數と同じくせり。星は夜に於てのみ光あり。太陽一たび出づれば、忽ち光を隱す。晝も星なきに非ず。大陽の光に壓せられて見えざるだけ也。晝は太陽の世界也。明々白々、公明正大也。夜は星の世界也。盜賊潛行し、惡事到る處に行はる。さは云へ、夜は夜の美あり。星は星の特長あり。星は星で可なれども、晝夜は一致せず。太陽と星とは幷せ見

るべからず。太陽の德は至大也。星如何に多くとも、豈に太陽の光を奪ふべけむや。

捨鐘

『一錢の鐘の響や二里四方二錢出しても四里は響かず』とは、帝國大學の一秀才が、試驗の答案に出して、和田垣博士より滿點を得たる狂歌なりと聞く。關東にこそ無けれ、京都や奈良にては、錢を取りて、遊人に鐘を撞かしむる寺あり。一杵一錢、十杵十錢、百杵百錢、如何ばかり多く撞きても、竟に捨鐘を撞くに由なし。錢がすたらざる也。時を報ずる鐘にて、始めて捨鐘を撞くを得べし。捨鐘は三杵と限られたり。一時には都合四つ撞き、十二時には十五撞く。捨鐘は唯捨つる鐘聲也。されば無用かと云ふに、否否、人の注意を促す爲に、是非とも無かるべからざるもの也。所

謂無用の用なるもの也。僧侶は、往々實際の言行上にも、捨鐘を撞く。地獄極樂も、言はゞ一種の捨鐘也。箱根の南の山麓に四里隔りて、二つの名刹あり。一を澤地の龍澤寺と云ひ、一を玉澤の妙法華寺といふ。或る時龍澤寺の和尚、三島に行きしに、妙法華寺の小僧に遭ひ、其和尚への傳言を賴む。小僧唯々たり。別るゝに臨み、また言傳を賴みて曰く、『妙法華寺の和尚糞を喰へと、俺が言へりと、傳へよ』と。糞を喰へとは何事ぞやと、小僧憤慨に堪へず。歸り來るより早く、滿面朱を注ぎつゝ之を和尚に告ぐ。和尚笑つて曰く、その前に、何か傳言がありしなるべしと。小僧思ひ出して、之を告ぐ。和尚頷く。小僧知るや知らずや。糞を喰へとは、汝をして前の大切なる傳言を忘れざらしめむとする也。龍澤寺の和尚は、汝に向つて、一種の捨鐘を撞きたる也。わが半生の言行を顧るに、餘り直情徑行に過ぎたりき。今より少し捨

鐘を撞いて見むかとも思ふ也。

縛られたる犬

幼犬を貰ひ來りて飼養するに、人にじやれること甚し。幼犬のじやれるは、普通一般の事にて、それが却つて愛嬌也。されど、この幼犬は、じやれるの程度を通り越して、寧ろ嚙みつく。頭をなぐれば一時は逃げゆくも、何故に頭をなぐられたるかを解せず、暫くすれば、又じやれつく。なぐれば、又逃ぐ。大人ならば、なぐるを得れども、幼兒はなぐる能はず。走り避くれば、益つけあがりて、利齒を脚に加へて、負傷せしむることさへあり。止むを得ず之を縛りて柱に繫げば、もがきて鳴きわめく。憫れむべき犬よ、豈に自から好んで汝を縛るものならむや。唯汝は本能のまゝに盲動して、人に害を加へて、其の惡なるを知らず。一般の安寧を保つが爲めに、汝を縛らざるを得ざる也。優しくすれば、つけ上り、叱れば泣く癖に、自覺を唱へ、開放を叫ぶ者、この犬に鑑みて可也。

畜生根性

子供連れて動物園に行きしに、子供は言ふも更なり、大人までも、最も喜んで見るは、猿と象と也。猿や、象や、間斷なく活動す。獅子の如きは、百獸の王と云はるれど、元來怠惰者にて、幾んど活動せざれば、衆目を惹かず。一寸惹くも、長く人の足を引留めず。二匹の狐の居る處あり。一は稍大にして、一は稍小也。これも人の目を惹かざるが、食餌にとて、六七尾の大鰯投げ入れられて、喜劇忽ち起り、人多く集まる。大狐獨占して食ふ。小狐近づかむとすれば、振回りて利齒を露す。小狐恐れて逃ぐ。又來

る。又追ふ。又來りて、恐る〳〵、大狐の食ひ殘したる魚の頭と尾とのみを食ふ。大狐は思ふまゝに食ひて、餘れる魚は、唯一尾のみとなりぬ。腐敗したるにや、鼻先にて嗅ぎたるのみにて、食はむとせず、不平不滿の樣子なりしが、やがて其魚の上に跨る。何を爲すかと、思ふ間もなく、魚の中央と覺しき處に、糞一つ放り出して去り行きぬ。小狐も之を食はむとはせざりき。

チユーリップの花

垣根疎にして、道路より見透かさるゝ庭の面に、いろ〳〵の草花を培養しけるが、チユーリップの花開かむとすれば、いつしか一つ減り、二つ減り、數度にかけて、五つ六つ盜まれたり。夕にありて、朝に無きは、夜に乘じて、梁上の君子の來れるなるべし。他に値高き、小植物多けれども、一切持ち行かざるは、貧故の盜とも思はれず。チユーリップは、培養の如何によりて、其花如何やうにも變化す。云はゞ培養甲斐のある花也。之を人にすれば、敎へ甲斐のある少年也。美花を生ずると、人材を出すと、事は異なれども、趣は同じ。人材出でて世益を爲せば、敎育者にとりて、これほど嬉しきこと無し。頑冥にして化せざるも、心正しく、信ずる所あり、守る所ある者は、なほ敎へ甲斐あり。放縱にして惰弱、劣性にして小慧、心に師とする所なく、唯私慾に殉して、道德の外に逸し去る者は、敎へ甲斐の無き不良少年也。聞く今頃の不良少年は、チユーリップを以て、ハイカラの女子を釣ると。敎へ甲斐の無き人にして、培養甲斐のある花を竊む。天公は人間の矛盾を笑はむ。

山道

伊豆山溫泉より湯河原溫泉へ越ゆる山の峠に至れば、道、五條に分る。標示あり。曰く湯河原道、曰く門川道、曰く伊豆山道、曰く日金山道、曰く山道と。最後の山道の語に注意せよ。湯河原道も、門川道も、伊豆山道も、日金山道も、いづれもみな山道也。然るに特に山道と稱するものあるは何ぞや。山中にて特に山道と稱するものあるは何ぞや。山中にて特に山道といふは、草刈にゆく路也。若しくは炭燒小屋に行く道也。行きつまつて居る也。つき拔けて居らざる道也。山道の路は却つて廣きに、旅人誤つて迷ひ込みて大に困ること多し。山道はこの峠にあるのみならず、到る處の山に在り。山に在るのみならず、人生にも在り。志小にして私慾に拘はり、私情に捕へられ、一身の安樂を求めて、社會あるを知らず、國家あるを知らざるは、これ山道を行くもの也。總ての道は羅馬に達すと云ひけむ。日本國中、總ての道は東京に達す。山道も、戻れば東京に達すべけれど、進みては唯行きあたりばつたり也。

杖

箱根よりの歸るさ、杖を買ひて汽車に乘る。妻と幼兒とをつれたる一紳士あり。其妻小さき物を落したるが、ベンチの下に轉がり行き、紳士之を取らむとすれど、手屆かず。車中を見渡し、一紳士の杖を借りたるが、杖の先が大なるを以て、それも屆かず。これにては如何にと余の杖を貸したるに、幸に先が小なりしを以て、取り出すことを得たり。買ふより早く物の役にたちたるかと嬉しく思ひぬ。もと我國にては、老人か按摩の外は、杖を持たざりき。維新以後、紳士も持ち、學生も持つやうになりたり。これ西洋人の眞似したるやうなるが、我國にても、富士山に於ける金

剛杖の如き、登山若しくは旅行する場合には、多く杖を用ゐたりし也。旅行の經驗あるものは杖の必要を感ずるなるべし。擊劍を學びたる者も杖の便利を知れるなるべし。單に運動の點より見るも、散歩には杖を持つを可とす。然るにこの頃は、紳士も學生も杖を持ちて歩くもの幾んぞ無くなりぬ。而して懷手して歩くもの大に多くなりぬ。人心の惰弱に傾ける一反映とも見るべし。杖を持つ持たぬは事小也。は其惰弱の風を惡む也。

大根

人の小指よりも細き細根大根あれば、人の身體よりも大なる櫻島大根もあり。名古屋大根の長きもあれば、京都大根の圓きもあり。大小長短さまゞなれど、大根はすべてみな純白也。亦美ならずや。唯見ても氣持よし。生にても食ふべく、煮てもよく、漬けてもよく、磨りおろしてもよく、酢にしてもよく、他のものと能く調和して、調理に便也。猪肉と合せて煮る時は、猪肉が主にして、大根が副也。なほ猛烈なる帝王に、聰明なる宰相の副へるが如し。又短氣なる店主に、堪忍強き番頭の副へるが如し。又ぴん〳〵したる亭主に、どつしりしたる女房の副へるが如し。油揚と合せて煮る時は、大根が主にして油揚が副也。なほ快闊なる帝主に機敏なる宰相の副へるが如し。又寛大なる亭主に怜悧なる女房の副へるが如し。味は淡泊なるが、淡泊のみにもあらず。試に頭の方を生にて食ひて見よ、甘味あるべし。又試に尻の方を生にて嚙りて見よ、辛味あるべし。芋といへば、薩摩人の異名の如くなり居れるが、薩摩人には、その國産の櫻島大根を代表する人物、少しとせず。現時に在りては、東郷元帥これ也。少し前に溯れば、西郷隆盛これ也。その弟の從道もこれ也。普通の練

馬大根にても、大石の壓迫に堪ふれば、澤庵となりて、一種の妙味を生ず。醫家の說によれば、殺菌力强くして、消化を助くとの事也。

人の顏

懷ひ起す、二十年前、外山先生の敎授を受けしをありけるが、同級の學生、凡そ七十人。先生は學生の出席を調ぶるに、學生の名を呼びては、一々じろ〳〵其顏を見たり。かくて稽古の時間の三分の一は、出席調に費せり。斯くすると凡そ一週間に及びけるが、それより後は一切學生の名を呼ばず。唯學生の顏を見て帳簿に付けたり。先生は僅々一週間にして、學生全體の顏と名とを併せて記憶せられたる也。われ成程と感心して、中學の敎員となるに及び、その眞似をして見たるが、一月經ても、生徒の名と顏

とを併せて記憶することは出來ざりき。事小なるが如けれど、實は大也。社會に活動せむと思ふものは、人の名と顏とを記憶して忘れざることが、一大要件也。それも少數なら、何の事もなけれど、業務多端になり、面會する人多くなりては、中々一々記憶しがたきもの也。それが數千萬人の上になりても、數十年の久しきに亙りても、一度逢ひたる人は忘れずといふ人は、必ずやひとかどの事業を成し得べき資格を有するもの也。むかし、張巡は二萬人の兵士の顏と名と併せて記憶し居りたりと聞く。われは到底之を能くせず、一室に閉居し、筆を執りて自から樂む。記して、大に世に活動せむとする有爲の士の參考に資す。而かも唯單に顏と名とのみを併せて記憶せよと云ふに非ず。それ以外、何を記憶すべきかは、其人の智慧次第也。

人の目

比目魚は、親をにらんだ祟にて、目が後につきたりとの事なるが、人間にも、尻目といふことあり。これが意地の惡き繼母や姑などに折り〳〵見る目にて、いづれ、よい目には逢はれざるべし。横目といふものは、學課に趣味を感ぜざる少年が、よく敎場にてあらはす目なるが、それでは、心の窗と云はるゝ目の役が出來ざるべし。人の目は顏の正面に付き居るに非ずや。よしや箱の中の物を見る所謂千里眼は無くとも、前を見て、前へ進みさへすれば、立派なる人間也。後を見ては、退くの外なし。横を見ては、前進がにぶる。動物も猿となれば、人間と同じく目が正面に在り。やや下りて犬馬となれば横に在り。支那金魚となれば、横に飛び出し、飛沙魚となれば上に飛び出す。それで見るには調法なるが、

目の刺擊に忙殺せられて、萎縮するの外なし。借問す所謂現代人、時に目をつぶることの趣味を解するや否や。

土俵際

我國の角力は土俵あるを以て、面白味を生ず。面して土俵際の踏ん張りといふことが、角力には肝腎也。土俵際にて踏ん張らむには、腰の强きを要す。腕力のみにては、不可也。どし〳〵押されて、直ちに押し出されては、餘りにあつけ無し。うんと土俵際にて踏ん張れば、敗を轉じて勝となすことを得べく、弱者が案外に强者を負かすことを得べし。見物しても、氣持のよきもの也。

社會は一種の土俵也。智者必ずしも勝たず。强者必ずしも勝たず。勇者必ずしも勝たず。勝負は何時も土俵際にて決す。土俵際にて踏ん張り得る者は勝ち、踏ん張れざる者は敗る。角力と同

じく腰の強きを要す。權威に腰を拔かす者、黃金に腰を拔かす者、利害生死に腰を拔かす者、いかに學力あるも、如何に智力あるも、竟にこれ社會に於ける拙手の角力取なるべし。

泉岳寺の墓の數

知れて居るものを數へる泉岳寺と、川柳子は詠めり。『泉岳寺の四十七士か。四十七士の泉岳寺か。四十七士の墓場なれば、墓の數は、數へずとも、四十七ある也。それを、わざ〳〵數へて見るとは、馬鹿な奴哉』と、利口ぶつたつもりなるべし。然れども實際數へて見よ。四十七と思ひの外、今一つ多くして、四十八ある也。利口ぶつた川柳子も、忽ち閉口して頭を搔かざるを得ざるべし。さらば其一つ餘計なる墓は、誰の墓ぞや。曰く、薩藩士の喜劍の墓也。喜劍とは何人ぞや。林鶴

梁が碑文を作りたる喜劍、卽ち幸田露伴が『奇男兒』と題して小說に作りたる主人公の事なりといふ說あり。然らずといふ說もあり。四十七士の墓を數ふれば、玆に歷史上の大問題が生じ來る也。とにかくに、東京高輪泉岳寺境內、四十七士の墓場に、墓の數が四十八あることは事實也。然るに輕佻なる小才子は、早合點して之を數へず。一事は萬事、いつも物事の皮相を早合點して、徹底する能はず。十歲で神童、二十歲で才子、三十歲過ぐれば唯の人。川柳の味が田舍漢にわかるものか、何處の料理が乙だの、乙でないのなどと、下らぬことに通がつて居る間に、都會の實權は田舍漢に占められて仕舞ふ也。

金の指環

年若き一商人、仲間の催しに加はりて、鮎狩に行けり。一つの

『瘤』をつれたり。子か、子に非ず。結婚して、まだ一年を經るか經ぬかの最愛の妻也。釣する程に、少しも釣れず。じれつたくてたまらず。驟雨さへ至る。仲間の者どもとても、鮎を釣りたくてたまらざれども、男らしく思ひ切つて、一先づ旗亭へ歸りゆく。この商人、獨り留まる。雨が何ぞ、われ必ず人一倍の鮎を釣らむと氣張つて、否、慾張つて見たるが、雨にはかなはず。妻を旗亭に走らせて、蓑をもち來らしむ。妻、命のまゝに蓑をもち來れば、其男は在らざりき。在れども、黑焦になりたる屍骸なりき。言ふまでもなく、雷に打たれたる也。商人や、憫れむべし。其妻や、猶更憫れむべし。其妻の腹には、子やどりて、八月に成り居れり。鮎を慾張りたる爲に、妻をして寡婦たらしめ、子をして生れながらにして孤兒たらしむ。世にも憐れなる出來事に非ずや。これ近時、新聞紙の傳ふる所也。なほ新聞紙は傳へて曰く、この商人は

金の指環をはめ居れり。故に電氣を引きたるならむと。ますゝ以て悲慘也。世上輕薄の女子は、金に目なし。金の指環に釣らる。雷までも、金の指環に釣らる。鮎や利口也。肉色赤銅を欺く漁夫の手には釣らるゝとも、金の指環などはめたる優男の手には釣られざる也。

門の柳

三十萬圓の財産を有せる一富豪、熱海に滯在しけるが、伊東に來り、長夜の飲を爲して歸らむとす。醉步蹣跚たり。危險に思ひて、若衆を從へしめむとしたれど、頑として肯んぜず。飄然として立ち出づ。六十餘歲の老人也。元氣は元氣なれども、年が年也。殊に醉へること甚しとて、若衆をして、十間ばかり隔たりて尾行せしめしに、老人之を知り、怒つて之を叱る。此の如きと再三、

若衆も終にむつとして歸り來る。然るに、案ぜし如く、老人は山道に迷ひ込みたり。懸崖より落ちて死したり。熱海へ歸り來らざるに、伊東へ問合はすれば、既に出發したりといふ。さらば途中にて變ありしならむとて、大騷ぎをして搜したれど、見當らず。百圓の賞を懸けて搜索せし結果、漸く其死體を發見せり。愚にもつかぬ死方をしたるもの哉。それにつきて、人の噂とり〴〵也。世事に長けたる一老人曰く、若衆を從ふれば、祝儀をやらざるべからず。三十萬圓の富豪はその祝儀を惜みたるなりと。其人また若衆を咎めて曰く、他人ならこそ叱られてむつとして歸りたれ。あれが身内の者なら、如何に叱らるゝとも尾行すべきなりと。讀者よ、この言を考一考せよ。斯くまで深切を盡すに、斯く迄沒分曉なるかとて、むつとするは、人情の免れ難き所也。斯く云ふ我れも、この若衆に似たることなかりしとせず。それにつけて思はるゝは、むつとして歸れば門の柳哉。

東京の雨

日本の中心、文明の刺擊最も激しく、生存の競爭最も甚しき東京に住む者は、精神上に、物質上に、四面多くの敵を控へたり。下つては、電車に乘るにも、男女老少先を爭うて相鬪ふ也。萬丈の黃塵とも鬪ふ也。雨とも鬪ふ也。多くの土地に於ては、雨は直下す。傘を差して居れば、腰より下の濡るゝことなし。されど、東京の雨は横さまに降る。後より降る時は、『冥途戀の飛脚』の『かたげて急ぐ阿彌陀傘』となり、前より降り、右より降り、左より降る時は、傘を持つに、竹刀を執るの手付を爲さゞるを得ず。雨と鬪ふといふこと、東京などに於て、始めて意味あり。傘を一種の花として、天上より眺むれば、東京の傘の花は、素直に正し

く立たずして、前か、後か、右か、左かに曲り居る也。斯く雨の横さまになるは、風の加はるに由る。自然の空氣に低氣壓あるが如く、文明の空氣にも低氣壓あり。東京は雷に自然の風の吹きすさぶのみならむや。魔風吹き、戀風吹き、驕慢の風吹き、逸樂の風吹き、虛榮の風吹き、浮薄の風吹き、黃金の風吹き、邪慾の風吹き、文弱の風吹き、不義の風吹き、墮落の風吹き、亡國の風さへ吹く。天下の秀才、こゝに聚まれり。而して所謂不良少年も簇出す。東京に學ぶ子弟の多きと共に、『心から横しまに降る雨はあらじ風こそ夜の窗は打つらめ』の嘆息を繰返す父兄の少なからぬこそ憐なれ。

馬と牛

牛は牛連れ、馬は馬連れ、牛と馬とは相群せざるものなるが、

家畜として、犬と猫と一方に相對峙せるが如く、牛と馬とも他の一方に相對峙し、同じく乘用にも輓用にも供せらる。馬は常に皇室の御役に立ちけるが、御大葬に際しては、牛出でて御轜車を輓けり。馬は走ること早けれども、鷩き易し。牛は歩むこと遲けれども、力强くして安りに驚かず。馬も駿馬となれば、安りに驚かず。馬の長所と牛の長所とを合せ得たるもの也。鬪牛はあれど、鬪馬は無し。馬は牧場にありて、往々狼に害せらるゝことあれども、場内に牛の糞一つでもあれば、狼は近づかずと聞く。明治の進歩は、馬の走るが如くなりき。大正の國民は、牛の如く力强くして、安りに驚かざることを期せざるべけむや。

吹けば飛ぶ

蒲公英の花、春の暮になれば、白色の一塊となる。之を手にし

て、息吹きかくれば、ばら〳〵飛び散りて、莖のみとなり、花はあと方も無し。蕪村の句に、

春たけて蒲公英の花吹けば飛ぶ

とは、蒲公英の末路を形容し得て妙なる哉。幼にして神童と云はれ、少なくとも優等生と云はれ、先生から褒められ、一村の父老から褒められ、友達から褒められ、兩親も鼻たか〴〵、己れも鼻たか〴〵、それが一生を貫くかと思ひの外、軟文學に誤られ、媚ぶる人々に誤られ、虚榮心に誤られ、學問が一向深くはならず、人格は小さくかたまり、神經のみ尖りて、唯一寸目の先の事にのみ氣が利き、こせ〳〵ちよこ〳〵と立ち廻つては見れど、失敗又失敗、吹けば飛びさうな男となり果つるこそあはれなれ。

二十歳と四十歳

春に蒔きたる種は、秋に實熟す。人の十代二十代に於ける努力は、四十代五十代になりて、功を奏するもの也。二十歳前後は勉强盛り也。頭の出來る時代也。四十歳前後は働き盛り也。腹の出來る時代也。勉强盛りの時に、頭を拵へて置かずんば、働き盛りになりて、腹が出來ず。四十にして惑はざりし孔子は、十五にして志を立てしに非ずや。二十前後に志を立てざりし人は、四十になりても惑ふ也。五十六十になりても惑ふ也。

俗に二十五と四十二とを男の厄年と稱す。肉體の上に變動起るもの多けれども、身分の上にも變動起るもの多し。同じく厄なれども、厄の種類は異なれり。前者は人に使はるゝに於て、大に成功もすれば、大に失敗もする也。後者は人を使ふに於て、大に成功もすれば、大に失敗もする也。使はるゝ時代に使はれて信用を得ざるものは、使ふ時代に使ひても、心服を得ざるもの也。